和漢

朗詠國字抄

五六

へ7
4399
3

へ7
4399
1-2
へ7
4399
3

雜

風

春の風い暗ゝ庭前の樹を剪。夜の雨い偸ゝ石上の苔を穿

入松亂易。明君之魂を惱さんと欲流水歸不。列子之乘を送る應

和漢朗詠集抄卷之五

雜

風

陰陽激怒の声ゝて土竅より出ゝ地上ゝを横行す四時の氣候ゝ時の氣運ゝよゝ或い東ゝあるい南ゝ

春風暗剪庭前樹。夜雨偸穿石上苔

輔倡

春の風が暗ゝ庭の木の枝や梢を刀ゝて剪ゝのごとくふ芽をとゝくまする夜の雨人をゝび偸ゝ石の上の苔穿り

入松易亂。欲惱明君之魂。流水不歸。應送列子之乘

紀納言

風中の琴ゝと云題ゝて風のふゝゝ琴の音交りまじゆゝと意ゝ風の松ゝ吹入る音い琴ゝ聞へるゝ実い風ゝまゝ乱易琴ゝ入松の曲ゝふゝる王明君漢帝の諱の字ゝ避後昭君ゝす匈奴ゝ和せゝ昭君ゝ胡国ゝ嫁せゝむ其道すゝ琵琶ゝ調ゝ心ゝ慰ゝゝ今松風の琴の乱ゝゝの琵琶

漢主の手中に吹て駐不徐君の塚上に扇で猶懸り

班姫扇を裁く誇尚り應。列子車を懸て往還せず

も合せぐ〳〵魂とるやまんとぞ琴に流水の曲あり又車の名に流水あり漢書に出列子名い禦冠風を乗こう吹まて空中を行〳〵人〳〵今流水の曲をもつぐ〳〵風のひぐきそふことを云んて流水の車ぐるまぐわ列子ぐ乗をもつくるぐ〳〵作〳〵人列子い道学一家をもつ

漢主手中吹不駐徐君塚上扇猶懸

北風利と劔の如〳〵と云題へ漢主い高祖へ三尺の劔を提て天下保胤

てぐ〳〵後ひろ帝王の詩に釈すまに有今此劔い風ぐ手中に駐ず呉王の弟季札

い賢者へ王の使〳〵と魯に行道に徐の国の君に宿りに季札の佩たる

劔をそ望に氣色をきい興んと思へども君命を終帰る時おさんりのこ別れ

去に〳〵ふ徐の君卒〳〵けこい悲み墓に至塚の松に劔をとりけて去〳〵こ

史記に出たんば季札が劔い猶今も風の扇処にようと云て北風劔のごとと云

班姫裁扇應誇尚列子懸車不往還

清風何の處に隠ると云題と作班婕妤團雪の扇と作持られば保胤

炎天風をもも誇り自ら吾と尚べ〳〵裁い素き紈と裁扇につくるり

姫い女と云に同ド納涼の詩扇の詩雪の詩に釈こ列子のと前の詩に出礼記に七十にて車を

懸と云てあり仕と止車と揚ようけりあ〳〵ととぎるえ風の止ら心

雲

竹湘浦に班〳〵て雲鼓瑟之跡に凝。鳳秦臺を去て月吹簫之地に老ら

後撰

秋風の吹つ寄てもとぬれ萩の葉うへ〳〵ぬ〳〵てま　中務

恋哥に憑人のうれ〳〵ふるし心の秋風を恨るむる折に萩の葉そよぐ音づ

ろうそ秋風にふつけてもうき人いさらぬこよ此人萩の葉ともあ〳〵音信すぎふ

新古今

ほの〳〵とあけぬの月村雲にまぎれぬる山ぬろしの風　伝明

ものく〳〵残りる有明の月ぐぶ山風ようるのみぢぐのぐるけ

ぬりぬ見さるこの哥三十四字あまぐも耳に〳〵ずとらく

雲

陰陽の氣聚に山の草木水氣と吸ると太陽に蒸升

れ雲とり風に散ぐ雨とり降る

竹班湘浦雲凝鼓瑟之跡鳳秦臺月老吹簫之地

作疑　張讀

愁の賦に堯帝の女娥皇女英二人ともふ舜帝の后なるぐ舜の崩のひを

悲み湘浦の岸ふ立て泣る涙竹ふそぐぎ班に染り後に生出る竹ふ班

に后心をとるぐさめんさめ瑟琴のひと鼓のひ〳〵后ぐんのひ相浦ふ葬

瑟をもつぐ〳〵跡ふ雲凝に永びを人もの〳〵ふ哀なるぞ秦の穆公の女

山遠して雲行客の跡を埋。松寒くして風旅人の夢を破

盡日雲と望む心繫不時有て月と見む夜方に閑る

漢皓秦と避之朝。望む孤峯之月を礙。陶朱越と辭する之暮。眼五湖之煙に混ず

哢玉を簫史に妻す夫婦に簫を吹て鳳の鳴をなす數年の後鳳その屋にとぶる二人のためにその臺を建鳳臺と云のち仙となり鳳に乘て去と列仙傳に出今鳳去さりしもの簫を吹て跡をとゞめ唯月のみかたゝびに住て久しくなりぬ老さらぼへたる上の句に同し

山遠雲埋行客跡松寒風破旅人夢

紀齊名

愁の賦に遠山に雲をみひきて行客のあとを埋松風寒くして旅人の夢をもとむ得ざるぞ

盡日望雲心不繫有時見月夜方閑

元稹

盡日に終日に朝より夕まで雲を望て心あくがるゝ事なし浮立とつるきとあり時ありて月をみれば夜も閑に物哀なり此詩閨女幽栖と云題にて独住女のこころを述

漢皓避秦之朝望礙孤峯之月陶朱辭越之暮眼混五湖之煙

江以言

賢人のかくれ処其上に雲をみひきて隱士あるを思ふと題せり賦に漢の代に東袁公綺里季夏黃公角里先生四人の賢人老て首皓

三四皓と云秦の始皇の乱政を恐れて都の南なる商洛山に籠かくれ處るかゝる其山上に雲をみひき孤峯のかゝぶ〳〵有明の月を礙かゝす越王勾踐呉王夫差と會稽に戦ひまけ〳〵主従呉の擒となりぬれども越の臣范蠡が謀にて免されつゝ呉王をたゝ一けり范蠡すでに大事をとけ大名の下に久しく居べからず飛鳥尽て良弓かくる老子も功成名遂て身退へ天の道なりと云〳〵と思ひ妻子と將て小舟に乘五湖のうづくに浮び去て齊に行あまたの金をもち陶朱公と云〳〵其越と去て湖に浮に水烟と上に掩へ雲とが混るゆゑ眼にみちぬ太湖丹陽湖青草湖彭蠡湖射陽湖と五湖〳〵す又は太湖の別名其めぐり五百里なるゆゑ五湖とも〳〵

暫借崎嶇非戴石空偸峻嶮豈生松

淵明が四時の詩に夏雲多奇峯と云句を題〳〵夏の雲立都在中升るさま奇峯の聳さふ似るゝ暫ハ崎嶇くちを借る実に石を戴へ空く峻嶮さまをぬすむ〳〵ども松の生べきまゝに山にあらずと云豈いかゞと云同

漢帝龍顏迷所處淮王雞翅失留連

漢帝の龍顏へ所處に迷。淮王の雞

翅い留連を失せん

晴

秋天無片雲と云題して秋の天晴一片の雲もなき漢帝い高祖以時御父い太公御母い劉温太沢の堤に昼寝をしふ空俄に曇雷電せり故太公往てこれふ龍降て孕て子を生其面龍のけしきあり高準とて鼻高鬢髪くるいく左の股に七十二の黒子あり名い邦字い季秦の都の巽に住る秦の始皇東南に天子の氣立のぎと聞尋ね殺すと有出芒陽山にかくまけり其居の上につねに五色の雲立をあてみ妻の呂后も尋行こ始皇崩ぬわぬる天下劉季位に即高祖と云是こ史漢に委し帝王に龍顔と称することこ始る今に心い空晴雲もなけれど漢の高祖の處の所をしる尋ねるこ所い虚字處い實字にて居と云義こ淮南王劉安仙道を得らしに藥を搗臼の庭に犬い天に吠雞い空に鳴とい空くれて雲なくんいかの雞の翅も連り留るこころと失へ〜〜こそ

新古今

ものそふのこころてやあらまし山の家の夕雲よりくもるべし

憲の哥に思ふ人と峯の白雲に なぞ〜〜と

ふ太和国の名所なり。

葛城高天とも

晴天なり雨あつ〜新に

霽の字といへり

晴

煙消て門外青山近露重て窻前綠竹低

雲煙消て晴もゑ青山も門外近くこそ露もげ〜窓のまへの綠竹低くこそなるさて晴興の題にて作る〜〜

鄭師冉

紫蓋之嶺嵐疎雲收七百里之外瀑布之泉波冷月澄四十尺之餘

唐の五岳の中南岳を衡山と云周旋すること數百里高さ四千一十丈とい其嶺を紫蓋と名づく〜天晴まへ白鶴その上に翔とい此嶺嵐をげ〜東南長沙まで七百里と云其間にこれ〜ぐるふ雲吹拂さると收と作れり天台山に四十五尺の瀑布あり白して布を晒でし泉の波冷きふ月澄て照す山晴て秋の望多〜と云題を作る詩の序ゆえ紫蓋瀑布に山とひ雲收と月澄〜こそ晴と秋のすべめ景色といへるなり

藤惟成

雲消碧落天膚解風動清漪氷面皺

碧落に雲消て天の膚すなわち衣と解脱して肌のこゝろふさ〜羅ろうと云風う清き漪と立て水の面に皺がよる波少く錦の文のごとぞ

都良香

雙鶴皐と出霧と披て舞。孤帆水と連て雲與消す

嵩ふ歸鶴舞て日高て見渭と飲龍昇て雲殘不

雙鶴出皐披霧舞。孤帆連水與雲消

空晴るゝと歡び双の鶴が皐と出霧をひらいて高く舞くるゝの沖と舟一つあると孤帆と臣ぞ孤帆之海つゝと行とゝえが遠くすゝとあり雲と消るゝ

菅三品

歸嵩鶴舞日高見飲渭龍昇雲不殘

晴後山川清と云題にて上の句ふ山下と川と云へり皐ふ居る鶴が晴れと美して嵩山と帰るその舞が日もさけてゝ晴るとゝえんとて日高てと依周の昊王の太子王子晋笙と好伊洛の水辺と遊び鳳鳴の曲をとり道士浮丘公とかゝひ嵩山とゝまると三千余年つゝ仙道を得て鶴と駕かの山より候氏山と往来せりと云故実とつゝめり胡国より漢と入る黄河と云あり涇渭文公の時終南山より黒龍出て渭水と飲と史記にあり龍昇て雲殘ぬる川の晴るゝと作る句ぞ ○歸嵩飲渭音とゝむ説なれば畧し

江以言

鹿鳴

春の麗るる空と有るも無るもゝらで糸のゝるゝ又ハ馬のそゝうあるゝも似るものあり荘子と野馬ハ遊絲ゝといと遊られゝ春の詩と釈

原本作者名欠

曉

夜曙て日輪の昇る程を云晨ゝ

佳人盡く晨粧ふ
於飾て魏宮ふ鐘動
於遊子猶殘月と行て函谷と鷄鳴

佳人盡飾於晨粧。魏宮鐘動遊子猶殘月。函谷鷄鳴

賈島

曉の賦ゝ魏王の宮中三千の美人佳人が晨と花粧するころ曉の鐘が動響遊子ハ諸侯の国とあそび士の旅人なり残月と行ころ鷄鳴て朝をつゝる秦の昭王の時齊とり孟嘗君質とゝ来居ける此人一ッの藝あるを養ふやゝと門下の客三千人と及べりある人秦ハ虎狼の国ゝを去ると云るぞ客のうちふ狗のまゝを得るるの在るふ昭王の狐白の裘と盗せ電愛の美人と通さぶ客の中ふ鷄のまゝとゝるるの木と上り鳴けふ関路のうちゝる鳴つまゝすハ夜明ゝとてひゝくゝ孟嘗君関と越のんとりるゝと史記とあり是とりづり和哥も雞の虚音いとるゝもとゝる

幾行南去之雁。一片西傾之月。赴征

幾行ぞ南と去之雁。一片西と傾之

月。征路ふ赴獨行之子。旅店猶扃泣孤城百戰之師胡笳未歇

嚴粧金屋之中青蛾正畫罷宴瓊筵之上。紅燭空餘

路獨行之子。旅店猶扃泣孤城百戰之師胡笳未歇

謝觀

曉の賦ゝ南へ渡来る雁の声々幾行うゝびつゝ空ゝ西ゝ傾く在明の月ゝ只一片ある追討使の命を蒙り征伐の路ゝおもき衆ゝ多ゝ獨行の男子旅店ゝ宿せる扉もまゝ明すあつき夏へ猶扃り胡と防ぐ孤城ゝ在て万里都と思て泣出て百ゝび戰百ゝび勝の軍とう〳〵衆師の耳ふ胡の笳あうたふうて吹歌ざるふいゝ哀なるさまゝ芦の葉ゝまゝ吹此胡笳を都の人聞ていまゝうふ哀ゝなるゝぞ百戰百勝ハ孫子謀攻の篇の字

嚴粧金屋之中青蛾正畫罷宴瓊筵之上。紅燭空餘

同

上ゝ同じ賦ゝ金屋ハ后の宮ゝ漢の武帝幼ゝ之阿喬と云美女をこのひ彼を得ハ金屋と造て置べゝと云まゝぞ嚴ゝ粧ひさる金の屋後宮の華麗なる中ふ美女ゝもゝ曉ゝ化粧ゝ青蛾ゝ畫ゆへの酒宴の罷さる瓊の筵ゝ紅燭空餘も曉のさまゝ一説ゝ嚴粧ハ美人よそゝ

五聲の宮漏初ゝ明て後。一點ゝ窓燈欲滅と欲時

五聲宮漏初明後。一點窓燈欲滅時

白

禁中ふ侍夜此詩を作り元九へ贈ゝ宮中ふ漏刻とおきて時を計一夜を五ゝゝ分ち初更ゝゝ五更ふゝる五声ハ五更ゝぞ明るハあつきまゝ窓ゝゝゝ一點の燈滅んとする曉ゝのさまゝぞ

後撰

あつきまゝ夏ゝ

あるぬ別の曉を怨る恋哥ゝ

白露ハおきてといへん枕詞

松

白

但雙松の砌下ふ當有更ゝ一事の心中ゝ到無

但有雙松當砌下。更無一事到心中

白氏新昌の閑居の庭ゝ松を雙植うれハ砌ふ當と云家に近と云ゝ世とのゝれゝまゝ世の中の事一も心ゝいうゝまゝ

青山ふ雪有て松の性を諳ゝ。碧落ふ

青山有雪諳松性。碧落無雲稱鶴心

雲無して鶴の心と稱り

琴商曲を改煙後吹て後簫瑟心を催雨を學辰

千丈雪を凌で磐康之姿に喻應百歩風に亂誰か養由之射を破ん

青山ハ松山のつゝ雪つゝ時こそ松の性寒ふ犯されず貞木と語ふ　許渾

知らゝ諸樹花咲みだるゝ時ハ松の操もあらはれぬゝ世乱まゝ賢人のあらゝにゝ〳〵碧落に雲なく鶴晴天とゝろこゝを心とゝゝ作まゝ

琴商改曲吹煙後簫瑟催心學雨辰

松風に秋の韵あると題〳〵商ハ秋の五音松風を琴ふ比〳〵松を煙とゝみゝゝ常盤なる松の声も秋風吹ゝ尋常のひゝきにゝる意ゝゝ　資忠

曲を改と云へ簫瑟も風の声へ樂の器に比〳〵ゝゝあめと学ハ松の

を雨に似るへ松の秋風に雨の音あゝ〳〵おのゝ〳〵秋の心をなゝ

千丈凌雪應喻磐康之姿百歩亂風誰破養由之射

柳化して松と為賦へ千歳を経る柳ハ衰ゝて松と成ると云ことあり　紀納言

千丈の松雪を凌寒ふ犯されず緑なる之晋の磐康字ハ叔夜七賢の威儀嚴

然ゝ〳〵形容なるつれハ山濤一人歎ゝ孤松の独立ゝと云ゝゝと

晋書に出たハうの姿に喻ゝ〳〵と作る楚の養由基ハ弓の名人〳〵〳〵

九夏三伏之暑月竹含錯午之風玄

冬素雪之寒朝松彰君子之德　順

九夏三伏之暑月ハ竹ハ錯午之風を含玄冬素雪之寒き朝ハ松君子之德を彰して百歩退て柳の葉と射る百ゝびゝあつて百ゝび中と史記に出今ハ心ハ百歩に風にゝぐゝ〳〵柳あり何りの彼射をさまゝゝげん千丈ハ松百歩ハ柳なり

十八公の榮ハ霜の後に露一千年の色ハ雪の中に深

九夏三伏之暑月竹含錯午之風玄

冬素雪之寒朝松彰君子之德

河原院の賦へ融の大臣の臣宅て奥州鹽竈の浦の景をうつし面白き所ありそのあらさまを述夏三月ゝて九十日此九旬を九夏と云三伏ハ納涼の詩小釈あり錯ハまゝりゝへ午ハ南方夏へ火へ涼ゝき風火氣ふ錯る心ゝて錯午の風と云錯をあやまると訓ゝ風すゝゝく夏を犯ゝあやまるゝもゝて夏のあつさゝも竹に十ゝゝゝ風を含へ玄ハ黒きへ北方のゝ冬ふ配素ハ白へ君子ハ有德賢者を云也の濁に汚されず松の雪霜に犯さざるたゝゝゝ

十八公榮霜後露一千年色雪中深

歳寒して松の貞を知題へ丁固と云人腹の上に松生ゝると夢こそ松ハ十八公と書るゝゝゝ十八オゝて公とゝゝと云ゝ詞ゝゝゝと會　順

稽録に出松を十八公と云ゝとゝゝ始る松の栄ハ霜ゝてのちふゝゝゝ抱朴子に松の齢一千年とす少きハのゝ雪のゝちにもふゝゝ

雨を含嶺松い天
更ニ霽ル秋を燒
林葉い火還寒

竹
煙葉蒙籠ニ夜
を侵色風枝蕭
颯ニ秋ル人ニ欲
ル聲

阮籍ガ嘯場ニ人
月ニ歩子猷ガ看
處ニ鳥煙ニ栖

晉の騎兵參軍王
子猷い栽て此君と

含雨嶺松天更霽燒秋林葉火還寒

嶺の松風が雨の音ニ似れい含と云実の雨ニ〜ねが天いられてある林の紅葉い其色火のごと〜秋を燒ると思ハ実の火ニ〜ゞ秋のくれも〜還て寒さ火ぞ

後江相公

古今
ちるまつのみどりも色ぞまさりける　雨の名まさりけり　宗于

ちぬいとといハ四季ニ〜ぬ松の色もさすが春ハ毎年ニやどゝ寛平の御時后の宮の哥合ニよめり

古今
春ニてもとゝくなかぬ松ぞ春の姫松いくよ経ぬ　千歳へふる

住吉四所明神い摂津国ニ姫松い松の惣名ニ松ニ向て問ニるゝぞ此哥伊勢物語ニよゝび在五中將のよめるなり

拾遺
あまくだるひとゝ〜ハさゝのわひあひをとゝ〜びとゝ　住吉ハ松　安法法師

ゝ〜ハ地祇と云又住吉ハ伊弉諾尊日向の小戸の橘の檍原ニ御祓〜ゝ時潮ニあ〜られ給ハ御神ニ後ハ神功皇后神勅ニよりて摂州ニいそひ給ひ〜ゝれば此神此国ニ跡ゝれのゝると天くだる現人神とよゝるゝもいとり相生い神木の松をよめるなり

竹

煙葉蒙籠侵夜色風枝蕭颯欲秋聲

涼州の令狐相公竹を愛セり詩を樂天ニあたゝる和韻ニ竹のもとゝ〜ゝ煙ニ〜ゝるゝ茂りニ〜蒙籠夜のごとゝぞ侵いもゝるゝ〜夜ニ似るゝゝ竹の枝ガ風ニそよゞ蕭颯い秋風の聲とあるゝ

白

阮籍嘯場人歩月子猷看處鳥栖煙

晉の代ニ七人の賢人竹の林ニ住琴をまゝ〜詩をつくり酒とのゝて樂けり阮籍字い嗣宗其一人ゝ竹林ニ月をゝるゝ〜ゝそぶさあゝくと人月ニ歩と云〜ゝ脣をとゝて吹とゝぞゝと云晉の王羲之ガ子王徽之字い子猷竹を愛セり竹葉青く茂ゝを煙ニゝる〜雀ゝるのあそぶゝゝと烟ニ栖ゝ作〜ゝぞ竹ニすむ小鳥と逍遥の友とせゝとあり此句い竹枝詞ゝるゝゝ作ゝるゝ

章孝標

晉騎兵參軍王子猷栽稱此君唐太

稱。唐の太子賓客白樂天愛て吾友と爲

逆笋未鳴鳳の管を抽(未)盤根纔に卧龍の文を點ず

子賓客白樂天愛爲吾友

脩竹が冬も青くてあるを題せる序に晉の世に騎兵參軍と云官ありし王子猷竹を愛し此君と称しより今竹の異名となる子猷前の唐の代太子賓客にて春宮に学問を教るつかさなりし姓は白泰の白公名は居易字は樂天北の窓に植て竹を友とせしこと白氏文集にくくり

逆笋未抽鳴鳳管盤根纔點卧龍文

前中書王

笋の數多芽を出せしは氷の逆とえぞいまだ短く笛わざうも抽出ぬ黄帝の臣伶倫氏崑崙山の竹を管に作鳳凰の鳴と学び笙ごうもまもろう盤ろう竹の根が手うあられ出て卧る龍の鱗の文と点ずと延喜帝禁中に竹を植のふをつくる年経ざる少未抽纔の字あり

古今

世の中を経て行ぞりのいひさがるの鶯のこゑ我音にあらぬかな

吳竹は葉わそさよのは弦の竹世といひふとしたへさあ

古今六帖

時雨には草木はいろいろそのるふ竹のそうぞもいろ世々へても

とどの色はいろいろぬ竹の操をんせいこ古今六帖にはいろいろをもとひろ

草

沙頭に雨深班班草。水面に風馳瑟瑟波

白

沙頭に草の萠出るが春雨に班々青こがつく

水面に風馳波がうちよする瑟々の波のうへ

西施顔色今何在。應在春風百草頭

元稹

吳越と伐て王と擒に越より西施と云美女を賂て王とする比竟に吳王をうばす越王又西施と愛しのあまぞ范蠡のさめて五湖にうつる時にも水に沈や失ひぬ其顔今何に在とかづぬる春風が百草とふるおびゆ

処にぞ在るこ古盛りし吳越の王も亡び愛せし美人の保ふのうへで空く

春の草原物おそんあるさまに又荘子に西施もひとりと眉をひそめる

さまにふく媚わしてぞ醜女もまねと学びいかくこうかしとひろ

瓢簞屢空。草顔淵之巷。藜藿深鎖。

滋鎖。雨原憲之樞を濕

草の色い雪晴て初て布護せう鳥の聲い露暖わ〜て漸綿蠻〜う

華山〜馬有て蹄猶露傳野〜人無

路漸滋〜う

雨濕原憲之樞

直幹

申文の句〜顆いるうひさご單い竹の器〜うゐ飯食とりぐ〜をれう食う屢空うてある顔回字い子淵孔子の弟子うて聖〜亞大德ゐんぐゐ生ぐ〜〜一簞の食一瓢の飲うて陋巷〜在るぐ〜道を樂こ孔子も美めぐ〜人なりれい草滋い意と依まう藜藿ゐわ〜ざ鎖い茂て路を塞〜孔子の弟子原思字い憲東の扉蓬の戸上い雨ゐ〜ぐ下い露沾ひ貧ゐんを愁げ琴をひいて〜すし賢者〜草の樞〜雨濕ふ心がをき躰ぐ〜民部大輔直幹我身を二賢者およせて書く民部い民の司天下の戸口を司るおりた職ゐまい望して書〜文も美〜道風清書〜ゐゐ天暦帝秘藏〜のへう

草色雪晴初布護鳥聲露暖漸綿蠻

後江相公

春日の山居と作りで雪が晴て草が萠布護鳥のさづ露ゐ〜ふなるまう〜漸およ〜ゐる詩ふ綿蠻い鳥の声とあ〜

華山有馬蹄猶露傳野無人路漸滋

慶保胤

山海経〜太華山高さ五千仞廣さ千里とう周の武王殷の紂を亡〜馬と華山〜放牛を桃林〜繫世治て兵車兵馬を用ざると示ものと

尚書〜ある本文〜よまう草が若きゆゑ蹄ゐんざ〜般の高宗名武丁御父の喪〜三年言ずして政もそ〜ゐるぐ賢臣を得て摂政せ〜めんことを希ゐ〜ある夜夢〜相とゐる〜ぐ〜みゐひ其身を画〜め尋求るゐ〜ぐふ傅野の岩窟〜住う翁と得来る果〜て賢者〜我川をゐ〜ぐ汝を舟楫とせん羹と和い汝と鹽梅〜せんと宣ひ傅野〜得て說のゆゑ傳說とめる此人出去けぎい餘〜人跡もなく路〜草も漸滋る

拾遺

かのとふまうるおのこまつかゆうそあうつ〜ゐ君ぐきまうきんこまうくきふせん　人丸

旋頭哥〜上の句五七七下の句五七七と文字の數をよわ〜ぐ上五文字再び返〜ものゐ〜ゐんぐうべとりぐ〜ぐ哥とけり彼岡〜草刈夫子尓か刈〜ぐ〜ぐ其まゐあ〜しめ君が来ん時の御秣〜せんとこ〜ゐゐさ〜ゐゐと云とうそい制を詞まぐさい馬の飼草なう

おゐあ〜きぐ森のわ草おうひかゐ〜ぐ絶〜すきめぐ〜ゐる〜ゐ　重之

古今おまう〜ゐ〜ぐ大荒木の森い山城此五文字おあ〜きことゐむと云草老ぬ〜ぐ駒も愛せぐ刈人もと人の老と思ひすゐ〜ゐ〜ゐ不愛

新古今

やすとも茅ぐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ　忠見

鶴

嫌らくは小人に而高位と踐くと。鶴軒に乘有。惡らくは利口之邦家と覆くと。雀能屋を穿

李陵之胡に入くに同。但異類を見る。

屈原之楚に在くに似る。衆人皆醉

聲は枕上に來る千年の鶴。影は盃中に落る五老の峯

清唳數聲松下の鶴。寒光一點竹間の燈

雙舞は庭前花の

野と燒く草崩出る日と火とも燃る崩と云らけるる子が春日とうけ其名の通るの日ふ任せおけ上のるは治定るの下り下知なり

鶴

嫌小人而蹈高位鶴有乘軒惡利口之覆邦家雀能穿屋

賈嶋

諸鳥を臣とし鳳を王とする賦に小人は愚る者と云帝王の臣下に才る き身を位に在ときは衛の懿公鶴を愛して大夫の位をあたひ軒に乘りて俱に行の一国人謗心をなす狄攻入る時鶴に防ぐものと云く扶ず公を殺其肉を食ひ肝ばかり殘り去りぬ弘鹽と云臣其肝を取已が腹と裂是をおさめ死ぬると史記に出鶴を愛し国を亡せと刺禁る心鳳と王とする題るをば口利が善者を譏已高位に經昇て終に君をうばひ邦家をうばすふ同じ毛詩の句をとる雀が屋を穿るは利口の邦家をうばすふ同じ毛詩の句をとる

同李陵之入胡但見異類似屈原之

皇甫曾

在楚衆人皆醉

群る雞の中に鶴の一羽とるる意の賦李陵字は少卿漢の武帝の時大將軍に匈奴と戰ひけるに其胡国に入るに允こるりの類と異にて李陵一人の都人と鶴に譬は楚の屈原湘江の漁父に對し衆人皆醉我獨醒と云衆人をふるに比す 屈原紅葉の詩に委

聲來枕上千年鶴影落盃中五老峯

春の部躑躅の詩に晚菜尚開と云其次の句に元氏の溪の家居に題せしゆ峯ふかく鶴の声枕上にきこゆ酒とくめば盃の中に山のうけば落る廬山に五ツの峯あり四時雪消す白頭ようく五老峯と云此名とこれかりて溪のすがを称美せり 白

清唳數聲松下鶴寒光一點竹間燈

松樹の下に立る鶴の声ゞすゝてきこゆる竹と植窓なふ燈一ツ光も寒く寂しさまを是在家の出家と云題して俗なる僧の境界へ 白

雙舞庭前花落處數聲池上月明時

落處數聲い池上月の明るる時

鶴舊里ニ歸。丁令威之詞聽可龍新儀ニ迎陶安公之駕眼ふ在

饑鶻性躁て忿忿乳て老鶴心閑ふして緩緩として眠

漢ニ叫で遙ニ孤枕の夢を驚し。風ふ和して漫ふ五絃の彈ふ入

樂天ハ鶴とおく詩ハ庭前花の落ところふ二羽すゝび〻池の上ニ月あきらかる時數声すゝといふこころなり

劉禹錫

鶴歸舊里。丁令威之詞可聽龍迎新儀陶安公之駕在眼

都良香

神仙の題ニて作る策の文ハ晉の哀帝の時丁令威仙と学び山ニ入て帰ナ千歳と経て白鶴とうつ〻舊里の花表ニるさ我こそ丁令威ふと云

秋の部月冬の部六安郡の陶安公いとびる兄鑄冶師すし一朝火散じ上りむらさきの色天ふつき升ふあそ怖居くふ朱雀冶上ニ〻

まろ〻天赤龍をくびて七月七日汝をもて竟ニ安公天上ニ列仙傳ふ出たれい令威が詞もき〻べく安公が駕眼のまへ〻ある

こゝあて神仙い偽談と云べ〻べくの意之

饑鶻性躁忿忿乳老鶴心閑緩緩眠

都良香

比睿山ニ題セル鶻い性さびこさぐ饑れ食とて忿々乳鶴の性いづるる老れいらより緩々ニ孤る乳こゝいのくゝ

叫漢遙驚孤枕夢。和風漫入五絃彈

霜のふる天ふい鶴声をとのこなざれ〻も又霜とりもむとこゝろ〻ぐ〻ふ

順

啼漢い天漢へそらのこゝろ用ふう孤寐のまく〻鶴の声ふゆめを驚す

又風ニ和て い漫ニ五絃の琴をあくべる曲ニ入叫詩い霜夜ニ鶴の声を聞題なり

方業

わ〻式浦ニ満くるこゝろ芦辺をきて田鶴唱るこゝろ　寿人

和哥浦い紀伊国潟乎無い潮ニ〻〻潟が無るくく又一説いあるあ〻ず方乎無いづくもなく鶴のなくて潮のこゝろ〻ず芦辺い水辺ニあ〻有へ

拾遺

おもふ〻ものさはぐ〻風ふ〻のありけるかな　伊勢

五条内侍の〻〻賀ニよるく太虚いふ空のこと群居い飛つるかこゝろ〻〻のしい助字さるべ〻〻内侍の〻〻千年のよひるく〻人

新古今

おもふ風ふ〻の酒ふ〻のぐ〻雲ふ〻ふらぎるべき　法正

猿

瑤臺霜滿。一聲之玄鶴唳。天。巴峽秋
猿。五夜之哀猿叫月

謝觀

天津風の空にふく風吹飯浦の和泉国の名所雲井の大内のたくひ清正六位蔵人にて天子の御前ちかくも奉りかの極薦の巡爵にて五位に叙せられこと
にて後五下紀伊守になる藏人をやめ地下にくだる還昇の志あるゆへ
身を田鶴にたとへくだる又雲の上に昇殿せざるをやとかう

猿

瑤臺霜滿。一聲之玄鶴唳天。巴峽秋
猿。五夜之哀猿叫月

清と云賦に瑤の臺に霜滿て老たる玄鶴が一声天に唳る山と山のたぎまと峽と云三峽山にて三ッ四ちぐる間水の流も回るさま巴のごとく巴峽
と云猿多し任国に行人に酒とくして送る人と別とおもふあつき
ちかき五更のころ其地景の清きふ月にさけび猿の声かなし

江從巴峽初成字。猿過巫陽始斷腸

蕭處士と云人黔南と云処へ行と送る詩にて秋の部月の詩に　白
不醉黔中と云前の句に江の流三峽に入て巴の字を書るごとくめぐる

巫陽も同じつきの山にてそんを過ぎ巴峽に至る猿のこゑまくの詩
に出るごとく腸も断ごとく思ひ初めてこの此景のありさまをこゝろ
ゑる當意始ての字に唯今の
哀情切なるこゝ後三義にて

三聲猿後垂鄉淚。一葉舟中載病身

樂天江州司馬に左遷せられ舟路にて妻女へ贈る詩にや宣都　白
山川記に三峽の猿の声の哀き三声にて聞人の涙をあざむくるを
みてあるごとく故郷を恋るごとく垂黄帝のこゝ木の葉の水に浮
べる理にて舟と造るこゝ一葉と云又一艘の舟と云義にも通ず
病身とは自己の
ありさまと云へ

胡雁一聲秋破商客之夢。巴猿三叫

曉霑行人之裳

江澄明

胡国の雁の秋の都へ来りて五湖の水上をとびすぎる舟に泊りき孫
せし商客が一声に夢を破猿のこゑ前三章の釈ふくに裳衣裳なり

三聲の猿の後鄉
淚と垂。一葉の舟
の中病身と載

胡雁一聲。秋商客
之夢と破。巴猿三
叫て。曉行人之裳
と霑

人煙一穂秋村僻。猿叫三聲暁峽深

暁峽蘿深猿一叫。暮林花落鳥先啼

谷静繞聞山鳥語。梯危斜蹈峽猿聲

人煙一穂秋村僻猿叫三聲暁峽深

僻処にあり。村邑秋の寂しさふ。をちこち立升る人家の煙が稲の穂の出るふ似くり。暁の峽山の猿三声さけびるゐ深きに秋山のさびしきと望こゝ

紀納言

暁峽蘿深猿一叫。暮林花落鳥先啼

暁山の峽の蘿ふかきふ猿の一声さけぶ寂しくてとさぞあゝ夕暮の林に花落るに鳥のなゝ音ゝびゝきさまぞ山中感懐の題に

江相公

谷静繞聞山鳥語。梯危斜蹈峽猿聲

山寺の僧の里ふ出て山中へ帰と送こ幽谷に住む問人もなく鳥の音を友とするのゝ深山の谷へとゝる梯斜てあやゝく山のそばまふ猿のなくい声と蹈でゆくこゝちかゝり

江相公

猿叫三聲暁峽深

ゝびゝらふ俺ゝゝまゝらの申へるい助字なゝ必をいるゝおゝ峽と甲斐と兼て云ゝ寛平法皇院亭子西川に行ゝゝる日御遊の時猿山のうひふさひゝ

紀納言

とりゝ題とのゝ法皇の御幸かまふ山のうひある今日あそいあること

ようゝう足曳はまうもいづ山とゝゝん枕詞ゝ高ゝ足をひき歩むこゝろゝ

管絃　付　舞妓

文選の註に吹と管といひ撫すると絃と云笙簧葉をて笛と管とゝ琴瑟琵琶箏のゝゐい絃ゝ舞妓いまひもめゝ

公乗億

一聲鳳管。秋驚秦嶺之雲。數拍霓裳。暁送候山之月

連昌宮のあゝさまと賦やゝ鳳管い簫ゝ昔黄帝伶倫とゝて崑崙山の竹をきゝしめ鳳凰のゐきと学ぶ簫こゝ起る秦国の雲ゝこゝ嶺まゝでもかの宮の歌舞のさまゝ數の拍子ゝて曲と奏候山の月更ゝあゝゝきまゝ舞ゝ傾ゝ月と送こゝろゝ葉法善唐の玄宗をさゝひ月宮ふいゝくり樂声とさゝゝゝて霓裳羽衣の曲と依ゝとゝゝう候氏山と云い王子晋仙道と得て去て此山に来簫を吹とあふ因り

末の仙家の詩ゝゝ

管絃　付　舞妓

一聲の鳳管い。秋秦嶺之雲を驚。數拍の霓裳い。暁候山之月を送

第一第二の絃い索索ゝ。秋風

第一第二絃索索秋風拂松疎韻落。

松を拂て蹂韻落。第三第四の絃い冷冷ろう。夜鶴子を憶て籠中ふ鳴

第三第四絃冷冷夜鶴憶子籠中鳴。

第五絃聲尤掩抑瀧水凍咽流不得

樂府の五絃弾の文ニ孔子家語ニ舜五弦の琴をつくり南風の詩を謠のふと長三尺六寸四分一年の日數三百六十四日を象り五ツの絃ハ木火土金水の五行を表し索々いみぶるえ秋風の松をたゝへ声ニ似てりろき意を蹂韻落といつり冷々いすきすゞき良夜鶴子を思ふ〳〵籠中ニ鳴ぐ〳〵物哀る声ニ別鶴操鶴唳曲抔あるようの掩抑いくぐるると云ニ瀧の水るとこ凍ふもせんで心ろくゐれ

白

ずいぐ隨分の管絃還て自足等閑の篇詠

い人ふ知被

隨分管絃還自足等閑篇詠被人知

頓ふ燈下に衣を裁婦と令。誤て同心一

衆と樂するふいあゝねども我ろニ隨ひろる管絃ふ自ら満足すると云心等閑い尋常ニ口号ふ詩文篇詠も人ニ知らるゝとゝよゝ

白

頓令燈下裁衣婦誤同心一片花

上

片の花を剪令

羅綺之重衣。妬無情於機婦。管絃之在長曲。怒不関於伶人

夜笛をき〳〵題ニ落梅の曲あり燈の下ニ衣をろる婦の笛ニ心ゐうろ一片の花文ぐとろう〳〵と剪誤ふ曲と同ド心ゝゝ

章孝標

羅綺之爲重衣。妬無情於機婦。管絃

春娃無氣力と云春の娃女ろ〳〵をろニ気力もるくろを内宴ニて作る序ニ此美女ろ羅綺も重き衣と思ろ〳〵ふぞ機おるをろのかきけるもの〳〵重し〳〵織出せと妬〳〵管弦の曲が長〳〵くんぐ舞ニ気力ゐ見ぐニ音樂の関ざるを伶人ニ怒ろ

関一本ふ關又關ふ作る非ニ

之在長曲怒不関於伶人

管

落梅曲舊脣吹雪。折柳聲新手掬煙

上の句ハ管下の句ハ絃ニ笛ニ落梅の曲あるび梅の花の落ゞ雪ニ似ろる意ニそのきろくを吹ハ雪とつくそあるとニ琴ニ折楊柳の曲あるび柳のりろ翠ゐるゞ煙ニ似ろる心ニかのきろくを弾すれゞ煙と掬うるそあ

管

相如昔挑文君得。莫使簾中子細聽

相如昔文君を挑て得ろ。簾中

を使子細に聽使
と莫

姓は司馬名は相如字は長卿蜀の成都の人なり貧うして
賢才あり琴をよく彈ぜり蜀郡卓王孫の女に文君と云あり
かの宅の簾外に琴をとゝのへ聽て思ひふかくして終に出まゝへのち夜
にまぎれて二人さりけり前漢書相如が列傳に以琴心挑之師古が註に
心を琴声に寄てひそかに子えと思ふ心と琴の音にもしめす女の心と
ひそかに琴のあやをもてあそぶこゝろをもわきまへ簾中の
婦女ふ子細聽しむるなり琴と彈ずると听題じや

拾遺
ちゝの絲よ岩に松風ちゝのをよりまくべをめけん　琴の音

琴の音のちゝまるは松風のひゞきに通ふ　ちゝいぶきの山の尾より
ちゝくべをよりまくべは松風のひゞきぞと山の尾と琴の緒とをよりまくべ

文詞 付遺文

古人文を作るものゝ文を云る詞を集る
遺文は文士過去てあとに其文の遺るなり

沈辭怫悅若遊魚銜鈎而出重淵之

底浮藻聯翩若翰鳥纓繳而墜層雲之峻

陸士衡

文選の文の賦に詩哥に是をつくらんと思ひつきてもいろ〳〵さまゝ
つゞらんとも覚へず其辞沈で深遠に怫い思ていまゞ出ず悅い思て微
来るゝ〳〵少しづつ案じぶつ〳〵かくこそ作らやと思ふい遊ぶ魚が
重まる淵のそこに在をとるべきやもちくまり〳〵鈎をもてこつ出さるゝが
ごとし浮藻い水のうへ草文を藻といへるふ云も文に文思をもつて浮
めば其早きこと曾て雲の高くさゞめきに翰鳥の聯り翩が纓とこ矢
に生絹をつけて射らるゝもちまち雲井より
墜来るぶぞ〳〵

辞に詞に作る

遺文三十軸軸軸金玉聲龍門原上土埋骨不埋名

白

京兆の少尹元居敬唐の長慶三年病に死せんとする時其子に遺
言して五平生詩を好り白氏い知己るこゝに遺文の序を作らしめ本

淵之底より出が
若浮藻聯翩より
翰鳥の纓繳而
層雲之峻より墜
が若

遺文三十軸軸軸
金玉の聲あり龍
門原上の土骨を
埋ども名を埋不

言語ハ巧ホ偷鸚鵡の舌。文章ハ分得ス鳳凰の毛

錦帳曉開雲母の殿。白珠秋瀉水精の盤

昨日山中之木ハ。材を已諸ホ取。

懷ヌンと云て卒ス樂天其序を書ク此絶句を書ク〳〵其集三十卷軸々ホ金玉の声ありと賞美するなり竜門の原のわたりふ葬ける黒骸ハ土ニ埋ルも名ハ世ニるぐ〳〵きこゆるとあり孫興公と云一人天台山の賦と作其友范栄期ニうらてるるに是を地ニ投ル金玉の声あぐ〳〵と云〳〵ろ〳〵しく文と褒るこぐとなるそ

言語巧偷鸚鵡舌。文章分得鳳凰毛

元稹

薛濤と云人の文と美てやる〳〵詞ハ巧なること鸚鵡のものいふと文の麗ハ鳳凰ホ仁義礼智信の文ありて五色のいろ〳〵美きを分得ることと

錦帳曉開雲母殿。白珠秋瀉水精盤

韓侍郎が詩とかやる〳〵文章のうるはしき玉殿ホ錦のとばりと白き珠と水精の盤ニ写すと雲母ハ玉の名ニ

章孝標

昨日山中之木材取諸已。今日庭前之花詞慙於人

篤茂

花の題して作る詩の序ニ荘子ホ匠石と云匠弟子と山をすぎる路のそばうニ櫟ありそのぐ大木なるゆ弟子伐ンと匠石不材〳〵と伐ず梁柱ともすべ板も用がたを不材と云此木ハ不材なるゆ〳〵つて天年を保つ人のオあるハオ也〳〵り用られ終ニ身をそこなふことあること寓言なるを必ニうること此文も序者自ら名ごりて身の不オホよ〳〵〳〵今日庭前の花の詩序を書ク詞ハ人ニ慙ごとく

王朗八葉之孫。撫徐詹事之舊草。江淹一時之友。集范別駕之遺文

源順

橘の在列出家して尊敬と云順其遺文とあつめ其序を作こむ也も人の作を其友のあつめ〳〵ことあること其例をひき書さ〳〵後漢書ニ徐詹事の作せ〳〵を八代の末孫ニ王朗註を作る舊草とハつく〳〵草〳〵きくる文と云て下書と草稿と云ころ〳〵江淹字ハ文通オあるく范氏の友さしぶ次後ニ其遺せる文を集〳〵徐と范と姓詹事と別駕ハ其人の官なり

王朗八葉之孫。徐詹事之舊草を撫。江淹一時之友。范別駕之遺文を集

今日庭前之花ハ。詞を人慙ホ慙

陳孔璋詞ハ空く病を愈。馬相如が賦ハ只雲を凌
贈爵の新恩ハ銘石に刻。獲麟の後集ハ世丘を知

陳孔璋詞空愈病。馬相如賦只凌雲

中将英明の集に題せし也 魏の曹操の臣陳琳字ハ孔璋 檄文〔檄尊敬〕を作ることを得たり軍吏と傳ると檄と云 南陽の張繍と云ものゝ謀叛を おこせしに孔璋に檄を作らしむ時に曹操頭風を病をりしが檄を作り おくりしかれバ曹公の病たちまち愈たり公歡で數万匹の帛をあたへしとぞ 魏志に出 司馬相如ハ管絃の詩の釈に出 此人上林の賦を作り しと漢の武帝よみ給ひ凌雲のいきほひありと感じ給へり此二人とくらべても 英明の文章をもくらぶるに比すれバ およぶべからずと云こゝろにて空と云只と云

贈爵新恩銘刻石。獲麟後集世知丘

以言

筑紫安樂寺菅丞相の廟にて作る也 逝去の後に贈られし 爵を贈爵と云 菅原道真卿延喜の御代に右大臣に昇りたまひに 左大臣時平卿二十九歳の若年文筆も菅公にをよびたまはざれバ 帝をそしめ諸卿まで菅公を尊信す時平卿つねに定国御菅根の 朝臣などと語らひ讒しけるにぞ昌泰四年正月廿五日太宰権帥 に迁し筑紫に流され延喜三年二月二十五日五十九歳にて逝

去ありし其後雷火さびしく都を焼しかバ一条院正暦四年五月廿日 左大臣を贈られ同年閏十月廿日太政大臣正一位の宣命下されし 贈爵の文を石に刻て御廟に建られしにより新なる君恩と作れり 又銘とハ墓誌銘とてその人生る世に功ありしことを志しるしその 廟にうづむ也 下の句ハ菅家筑紫にてつくりたまへる詩をあつめ 菅家後集として今に傳はれり獲麟ハ孔子の故事 魯の哀公 の時西の狩に麒麟を得たり麟ハ仁獸にて聖人の時ならでハ出ることなし 孔子感じて春秋を作りたまひ其文西狩獲麟と云一句にて筆を 断たまへりよつて世に 菅家後集を獲麟の後集と云 世の人此集を もて孔子に異ならぬ人なると知と云こゝろ 孔子の母顔徵在尼丘 山の神にいのりて孔子を生り其頂のくぼふして山の形に似たればぞ 丘と名づけ字ハ仲尼と云 此對句丘ハ名なれども呼ぶるをさけて訓ぞ云り 對し爵ハくらゐなれども すゞめと訓すれバ麟にも對せり

古今
いつはりのなき世なりせバいかばかり人のことのは嬉しからまし　讀人しらず

恋哥なれども人のこゝろと云によりて文詞の部に出 いつはりのなき世ならバ人の言葉いかに信すらん

酒

新豐の酒の色そ鸚鵡盃之中ふ清冷ゝ長樂の歌の聲ハ鳳凰管之裏ふ幽咽ナ

晉の建威將軍劉伯倫ハ酒を嗜て酒德の頌を作以世ふ傳唐の太子賓客白樂天も亦酒を嗜で酒功の贊を作以之ふ繼

風ふ臨杪秋の樹酒ふ對長年の人醉ハ如霜紅葉と雖是春不

生計拋來詩是業家園忘却酒為鄉

茶ハ能悶を散ず

酒

新豐酒色清冷鸚鵡盃之中長樂歌聲幽咽鳳凰管之裏

公乘億

友人の大梁ふ帰を送る賦ふ新豐縣ハ酒おろき処ふ史記項羽本紀ふ沛公酒を新豐の鴻門ふ置とゝ海中ふ鸚鵡ふ似る見ゝ其背を穿て盃ふ也ゝを鸚鵡盃と云清冷ハすゝるなり高祖本紀ふ長樂宮ふ酒宴して歌を發すとゝ鳳凰管ハ笛ふまゝの管絃の首章ふ釈す幽咽ハむせゞ哥の声樂のきゝふむせゞなり清冷ハひゝ冷々と云冷の字平声ゝ

晉建威將軍劉伯倫嗜酒作酒德頌以傳於世唐太子賓客白樂天亦嗜酒作酒功贊以繼之

白

酒功の贊ふ作以之ふ繼

風ふ臨杪秋の樹酒ふ對長年の人醉ハ如霜紅葉と雖是春不

生計拋來詩是業家園忘却酒為鄉

茶ハ能悶を散ず

樂天酒功の贊ふて酒とゝめる文の序ふ劉伶字ハ伯倫晉の七賢の一人ふて酒を好其德を頌ふ文を作文選ふ出る酒德の頌是ゝれを学び白樂天も贊を作ふ建威將軍ハ武官太子賓客ハ文官春宮ふ也を教てまる司ふ嗜ハ好なり

臨風杪秋樹對酒長年人醉ハ如霜葉雖紅不是春

白

醉ふ乗て紅葉と賦る秋の杪九月の比風ふ臨む木と酒ふ對へる年長る人の醉ふ白ふ同じゝ霜葉のごゝ紅なれども春の花ふゝゝ也ゝ也ゝ也ゝ吾身も老の未ゝ也ゝ也ゝ吹ちぐゝ

生計拋來詩是業家園忘却酒為鄉

白

今世を道ふて生計ハ也ゝ也ゝ也ゝ詩を業ふて楽む家園の也ゝも忘却酒ハ醉を家ふも鄉ふも思ふ前の猿の詩ふ同胸句ふ

茶能散悶為功淺萱道忘憂得力微

とぐも功と爲て淺。萱は憂と忘と道とも力と得て微なり

若榮期を使兼て醉を解せ使ば四樂を言應三を言不

醉鄉氏之國。四時獨溫和之天。ふ誇酒泉郡之民。一頃未沍陰之地

茶は本草の煩悶といふ。萱は毛詩に出

萱草は服して憂を忘るゝ草ともいへども功皆あさ唯酒こそ

夫にまさりてまことの忘憂草ぬ微一ふ遲き作

白

白

若使榮期兼解醉應言四樂不言三

孔子泰山ふ遊びて榮期先生と云賢人琴ひき歌うたひて在しふ先生何を樂と問へば答て我三の樂あり天万物を生じ人と貴しと子我すでふ人なれば一の樂と男は尊く女は賤し吾男子に二の樂と人生て日月ともうず襁褓をもざるあり吾すでに年九十三と三の樂と列子ふ出さるぬ酒は醉さる樂は又淺しと榮期に醉の心を解しめ四のたのしみとそいへる三とは言

漢の時榮期先生司空とるじが王莽が乱を避て山林ふ入て遁ぬ漢紀ふ出さるふ孔子は周の代の人にて五百余年まゝなれば列子と云一名

醉鄉氏之國。四時獨誇溫和之天。酒泉郡之民。一頃未知沍陰之地

江匡衡

を知

未

菓は則上林苑之獻。含自消。酒は是下若村之傳所傾甚美

先阮籍ふ逢て鄉導と爲。漸劉伶

後と寒と酒を飲多少ふる題の詩序と醉鄉氏の国と酒宴の処と醉の鄉と入ば冬の寒き時も春のそ。あたゝふ和する心地とる四季とふ此処ぐうりと云ふて獨と云酒泉郡は漢の武帝の開地名なるを酒多きところにかりる句なり郡の人は一頃もさるの地をとゝ沍いとゝ沍陰は左傳ふ沍寒とあるふ同凝寒の地

菓則上林苑之所獻。含自消。酒是下若村之傳。傾甚美

後江相公

上林苑は漢の武帝内裏の傍と開き苑をさもぐの果あるとと文選上林苑の賦と出こまと禁中の御園に比して云内宴の詩序あれば今席上にある菓は甘棠なるの含で消るゝと含消梨の名あるよそ丁は是いの苑とろ献ぜしの意下若村は酒多き所の地名なり傾てのめぐ甘美なるぐぶかの地の名酒を傳来るふなり

先逢阮籍爲鄉導。漸就劉伶問土風

小就て土風を問ん

邑に建徳に隣て
行歩すること非。境
に無何に接して
便坐忘す

王勤郷の霞を
浪に紫て脆。嵇山
康山の雪に流を
逐て飛

醉を郷にたゝ其醉の郷に入さまを作る阮籍字に嗣宗劉伶字に伯倫とゝ晋の七賢代内て酒を好む道の郷導て醉郷に入
まて境に入こに風と問くあれば彼ふ
就て醉郷の土地風俗とも問べし

邑隣建徳非行歩境接無何便坐忘

後中書王

前と同ど心の依て建徳に其名のめでたきこと用ひて酒をえて
醉の邑に建徳にとゝまりて行べき処にいる酒をえて
ところぶれて荘子に我有大樹謂之精種無何有郷と何もあんとい
意て醉郷に無何のさとに境をまぐれば酒にえひて方丈坐ゐて忘
ると坐忘も荘子
に出る文字に

王勤郷霞紫浪脆嵇康山雪逐流飛

慶保胤

酒をえひゐて水に落花をとる題に王勤に酒とすきし人
王勤郷にまへの詩の醉郷と云て霞に花と云て花も霞もまたのあなる
あの色に云醉のさとの花に水岸を紫ひぐりろく落る嵇康字に
叔夜七賢の一人其醉に玉山のくづれんとすると世説に云嵇康

山も醉郷に同ど雪と云も花に上に霞にまぎれて紅と云に雪にまぎれて
白きと云なれと逐てとぶに水に落ると云王勤と嵇康に上戸なるひ
と云に雪に紅白の花
浪と流に水に題の意と叶へり

あひのあたちさき蓋のうちもそひて出ぬと思へば　紀宦官

拾遺集小忌にあさけの人のうとまかりてまぶ女ども盃にひげを
て出しまぐと有七文字日にげもそひてとひて大嘗會新嘗會のと
ある時五節あど神支の役仕る人日陰のづくと云草をとりひろと
中ごろに紅てそして神支の時冠にかぶるものに是とそへて出セ
に哥のころに盃を月に云に有明の月に朝日の出ころ西にかく
ひくあつてこの月ゆゑ日にけのそひて出られば有明のこちすとなる
出ぬにおくんぬにて
出ぬるとにてこそ

和漢朗詠集抄巻之五　終

雑
山

黛色迥に臨蒼海の上。泉聲遥に落白雲の中

勝地い本來定る主無。太都山い山を愛する人ふ屬を

夜鶴眠驚く松

和漢朗詠集抄巻之六

雑

山

土高くして石あるを山と云
山い産え万物を産するえ

黛色迥臨蒼海上泉聲遥落白雲中

百丈山に題す　遠山の色黛に似るが大なるゆへ蒼海の上ままさに高山の泉声雲より落来るとおもふる　賀蘭遲

勝地本來無定主太都山屬愛山人

雲居寺に遊て作るえけしき勝地い誰をか主とせん唯賞し　白
翫人人こそ主なれ山を愛せ人こそ論語よ仁者い山をたのしむとい
仁恵ある人い尊身をもつて慈愛をこころざすゆへ
山い微塵をいとゝ故ゆへ太山とるの屬いつくえ

夜鶴眠驚松月苦曉鼯飛落峽煙寒

月苦。暁纔飛
落て峡煙寒
紈扇抛来く青
黛露羅帷巻却
て翠屏明なり
衆籟暁に興て林
の頂老たり。群源
暮に叩て谷の心
寒し

都在中　遥の峯の暮煙を題とせる也。鶴の眠も驚て松間なる月のさびしく心苦しきさまなり。暁纔ハあかつきのむさゝびと野衾のこと。峡煙ハ山の峡に雲霧のたちのぼりてすさまじくものさびしき体なり。又苦をさむとよみ、寒をさむしと訓る也

紈扇抛来青黛露羅帷巻却翠屏明

後中書王　遠山の夕煙といへる山の形あきらかなりと云題也。紈扇ハ白ぎぬにてつくれる扇。班女が扇の詩の字を取り。夏の部 納涼の詩 女の扇にて顔をかくせるが扇を抛すつれバ青き黛の露と見ゆるによそへて遠山をまゆずみのいろとみなして山の詩首章に出。羅帷ハうすものゝかや。びろう煙よそに巻却けりのちるゝ翠屏ハみどり色の屏風なれバ山によそふ。あきらかなれて山のあるゝ也

衆籟暁興林頂老群源暮叩谷心寒

以言　秋声多くハ山に在と云題也。籟ハさまざまのこゑ。荘子に地籟則衆竅是已とあり。風おこりて岩の穴枯木の洞などよりひゞくを衆籟と云。秋風に木の葉をおとし色を深くするを林のいたゞきが老たると作る。群源ハいくつもの谷のながれくだりて岩をうつ水音さえある谷の心寒しと云ハ秋のころ。林頂と谷心ハ山を云。老と寒ハ秋の心。籟興と源叩ハ秋声なり

拾遺集
名のみして山ハみかさもなかりけり朝日夕日のさすをいふにぞ　貫之

大和の三笠山ハなだかけれど笠もなく唯あさ日夕日のさすとよそへよめり

雲のゐる越の白山老にけりおほくの年の雪つもりつゝ　忠岑

拾遺集に年ゆきをと有年の冬のことなり。雲のゐる雲とハおほきなる越の白山ハ常に雪あれば老にたとへよみ雪のつもるを年の行つもるによそへてよめり

みわたせバ松の葉しろき吉野山いく世つもれる雪にかあるらん　兼盛

拾遺集にハ入道摂政兼家公家の屏風の哥とあり。深山にて雪深き所也

山水

山水

泰山ハ土壤ヲ讓不。故ふ能其高こを成河海ハ細流を厭不。故ふ能其深こと成

巴猿一てび叫て舟を於明月峽之邊ニ停。胡馬忽ニ嘶て路を於黄砂磧之裏ニ失

泰山不讓土壤故能成其高河海不厭細流故能成其深

李斯

秦王ニてまつる書史記ニ出る文ハ秦の始皇客をわかつむ讓公奏して止ハ李斯此文をきゝ止むぐること諫むさぐる大なる泰山も土壤の少きをとゝ積ハ大なれ河海ハわるゝ流をこゝ不ずもゝ底きもぬ海川とあり千里も足下よりもつ天ふうふ浪も一滴の露より起こと意なり人も其こゝ卑き者も一ツの技わゝ取て我美と成

巴猿一叫停舟於明月峽之邊胡馬忽嘶失路於黄砂磧之裏

公乘億

巴峽の猿の一ふ猿の詩ニ釈す又巫峽明月峽を合て三峽と云其南ふ石壁あり其山ニ圓き穴あゝ月ふ似る也明月峽と云巴峽の猿のうゝ叫ぶ舟を停て心中ゝぐさめ〻胡国の馬都ふ来ハ故郷を思ひ北風ふけば嘶ハ黄砂磧いるびすの地ハて土も砂磧も黄ゝ胡塞に向て旅をとゝるふ乗ハる馬いゝるゝ道の案内いるを不ずきまよひ愁ハとゝるの

礙日暮山青簇簇浸天秋水白茫茫

白

西ニ傾ハ日い山ハ礙ふ暮ハの遠山簇々ハて青ハて秋の水白ハ茫々天とひ不ぐゝふ浸る山水の景ハ

漁舟火影寒燒浪驛路鈴聲夜過山

杜荀鶴

臨江と云駅ふやゝて秋夜の作ハ海人の漁ハる舟ニ火を燒ハ魚のよゝるを取それが水ニうつを浪をやゝと作ハ秋也寒ハとゝるを勅使ハで他国ハ行ふ天子ハ印の鈴をの〻是を駅鈴ハも云其声ハ駅路ふ山をもぐるとゝハ

山似屏風江似簟叩舷來往月明中

山いけハ屏風と立ハるゝ江の水青ハ簟ハるゝつゝ八月の明ハる夜船とうゝ叩ハ舷い楚辞漁父の歌の字

劉禹錫

草木扶疎春風拂山祇之髮魚鼈遊

春の風山祇之髪を拔。魚鼈遊戯して。秋の水河伯之民を養

韓康獨往之栖。花藥舊の如。范蠡扁舟之泊。煙波惟新なり

山復山。何の工か削成る青巖之形。水復水。誰が家か染出る碧潭之色

山郵の遠樹雲の開る處。海岸の孤村日の霽時

山に向背を成斜陽の裏。水に回流ふ似迅瀬の間

戲秋水養河伯之民

江澄明

山水の策に扶疏は枝葉四ふ布に文選草木風ふるびくに山祇の髪を拔うそある魚鼈遊びくらしくい秋の水が河伯の民をやしなへ

晏子春秋ふ山祇以草木為髪以土石為身

河伯以水為国以魚鼈為民とあふりぐこと

韓康獨往之栖花藥如舊范蠡扁舟之泊煙波惟新

同前

上ふ同じ文に後漢書に韓康字は伯休仙道を得て山に入こりて採て長安の市ふ賣とある其人今はあくまで独往てすまる山のくまもろに昔はらくび年く花も咲范蠡越王句踐をたすけ吳王夫差を亡し功成て扁舟に棹し五湖うらびしい古のことをふ今も其ふの浪もろ水煙いろるることを新なると云

雲の詩に陶朱公とある是に釈見合すべし

山復山何工削成青巖之形水復水誰家染出碧潭之色

同前

上ふ同じ文に苔つく青き巖のくもち削立るごくそびくさあれる景色は何の工のもろぐさぞ水のもろ碧ふ藍とこに眼もおよぐぬわどうすめる潭は誰が家の染殿の染出せるもの

山郵遠樹雲開處海岸孤村日霽時

直幹

山路の郵駅の遠き樹は雲の末ともろこに海ともこに濱辺の孤村はこれる時ある

山向背斜陽裏水似回流迅瀬間

後江相公

山ふ夕陽のうる処とあつくさもくうるる日ふ向と背ることふうる迅き瀬の岩すぐふせろるいろつて回るあぐるうる思る

拾遺

物の名ふもろの木とうくに題そよるえうるひ立田和州に神南備の御室は山に立田川は水ある少に山水の部ふ入

水附漁父

邊城之牧馬頻嘶。平沙眇眇。江路之征帆盡去。遠岸蒼蒼

謝觀

洲芳杜若抽心長。沙暖鴛鴦翹翅眠

水附漁父

積陰の氣うちをあつまりて水をすむ漁父い網をひきて釣をたれ魚猟をこころとするものの

邊城之牧馬頻嘶平沙眇眇江路之征帆盡去遠岸蒼蒼

胡国をおもふ辺土の城外の牧ふ草飼てくるちあり馬いるかさて平沙眇々野原ニ往来のいもうとさえ入江の波路ふ舟ニ帆をあげて漕征去て出尽しぬれば遠くるる是ハ曉の賦ニ

洲芳杜若抽心長沙暖鴛鴦翹翅眠

乘府の文ニて漢の武帝のうたふ昆明池ニ春水満ると云題ニ　白

西方身毒国とこそんと思て彼池をうつし都の堺ふ方四十里の池をうつし船軍とおもへり仍て昆明池とつけ水中ふ土をうつして洲をなすふ芳菲の候とむつまじく杜若ハ萌いづる春のあくるる沙の上ニ鴛鴦のねもるのぐるあるさまあり

帆開て青草湖の中に去。衣濕て黄梅雨の裡ニ行

水驛の路い兒店の月を穿。花船の棹い女湖の春ふ入

菰蘆の扨い春の濃なる酒を酌。舴艋の舟い夜の漲ニ流

帆開青草湖中去衣濕黄梅雨裡行

客の湖南にゆくを送る詩ニ客の船い帆を開てこぐうの中を漕さる青草湖い洞庭湖の旧名ニ五月雨のころて日々衣を濕して歩行　白

梅の黄ばみ熟して落るころの雨ゆえ梅雨とも黄梅雨とも云

水驛路穿兒店月花船棹入女湖春

蘇州へゆく人を送るニ水辺の駅づたひの路なる兒店と云処ふ月の光をうけるとあけが光をうつしそへる花やふなべる船ふ棹さして女湖ふ入て其地ものぐるて春ふ入こちもしん花の字も春のるんあり　白

菰蘆扨酌春濃酒舴艋舟流夜漲灘

たくつまふ漁父の家ふあるさまを作りしえろづき器もあれゆえ菰蘆の柄杓をつくり酒をくむちニ舴艋い夜ふ乘ぐくこそなるこそ灘ふくだるこそ　杜荀鶴

閑居ハ誰人ゾ　於　紫宸殿之本主也。秋水ハ何ノ処ゾ　於　見朱雀院之新家也

釣を垂者ハ魚を得不。暗ク浮遊之意有ルヿト思。棹を移者ハ唯雁を聞。遥ニ旅宿之時に随ヒヿを感ズ

閑居属於誰人紫宸殿之本主也秋水見於何処朱雀院之新家也　菅

延喜の御時太上天皇寛平法皇朱雀院ニて閑居ス秋水を楽むとて題ニて文會ある序ニ閑居ハ誰人ぞとのたまふ紫宸殿の主太上天皇御位をゆづりたまひて閑ニ居たまふてある秋の水ハ何のところぞなれば此朱雀院の新たなる家ニてあるヿ三条の北朱雀の西にある殿の名とす世々の帝御譲位の後御座ところ

垂釣者不得魚暗思浮遊之有意移棹者唯聞雁遥感旅宿之随時　同前

前ニ云朱雀院の庭の池ニ月卿雲客遊興してまうでて云題を依る釣をたれ者あれて魚をとらんと魚も浮遊て水をたのしむ実ニこころあらんと思ふ水をたのしむ魚もさこそあらんと思ふ棹さして移行をきゝて旅の空のこころあらん舟ニ棹さして移行をきゝて旅の空の時を得ルヿを感ずるとのこころあり

沙頭刻印鷗遊處水底摸書雁度時　後江相公

水辺の沙の頭ニ鷗のあそびあり跡い印を刻ミ雁の渡るとげ水底ニ書を摸ミ雁ニ書ヲ是ハ洞庭湖ニ題ス

日脚波平孤嶋暮風頭岸遠客帆寒　平佐幹

濱辺にて旅の懐をのべ波平なる沖にて孤なる嶋ヶ日の脚西にさすを暮ニ風の吹ク岸ニ寄ル旅客の舟寒ク

古今
春ごとに花のかがみとなる水はちりてのちこそ曇りなきかは　伊勢

詞花
人かずに我はあらじと思ふ代にあはれとぞ思ふ世の中の　好忠

六十四代圓融院の御時内裏炎上ス太政大臣兼道公の家堀河ニあり其女ハ帝の中宮ニ行幸ス内裏造営まで

禁中

鳳池の後面新秋の月　龍闕の前頭薄暮の山

秋月高懸空碧の外　仙郎靜ふ翫禁闈の間

三千の仙人誰か聽こと得　含元殿ふ角管絃の聲

雞人曉唱　聲驚明王之眠　鳧鐘夜鳴　響徹暗天之聽ふ

朝候日高して冠の額拔　夜行沙厚して履の聲忙

住のうちの御位をうさせのひさびし堀河院まゐ兼通公うへ薨じのひ後へ此哥いさびし御行の時よろこ兼通公在世ふそ〳〵ひのひ水上の定めてそれば君が代よろこびすると水の緣語なるべし

禁中

公の門ふ禁制ありて妄人をとらざるを禁中といふ

鳳池後面新秋月龍闕前頭薄暮山

鳳池い文選の註ふ中書省を云と日本中務省を其後面新秋の月ぐさす内裏の前頭より薄暮ふくるの山ぐさるを闕い官門を龍の字と天子のことふのらるい漢の高祖龍顏あしふよりて龍闕い天子の居所をるのち内裏と云ふあるべ

秋月高懸空碧外仙郎靜翫禁闈間

八月十五夜崔大と云官人直一月とゝて酒を飲をきゝて樂天の送一詩へゝるの空ふ月う高くうつすあるを仙郎い内裏ふ宿直する崔大をきゝて云り禁中の闈門のあるふひとり靜ふ月りてあそびあるとゝ

章孝標

三千の仙人誰か聽こと得　含元殿ふ角管絃の聲

學業をこゝろまて士ふ挙らるゝを及弟と云是も其時の詩ゝて仙人い文人をゝ人多さ中ふ我のゝ此管絃と聽と云さ及弟〳〵こゝ

含元殿

い禁中の殿の名ゝり

雞人曉唱聲驚明王之眠鳧鐘夜鳴響徹暗天之聽

都良香

漏刻の策ゝ器ふ水を盛下ふ穴をあけてゝ水をすゝ中ふ時を刻める矢と立時を計る雞人い漏刻をつさゞる官人ゝ時を奏するゆ雞ふあぞ〳〵る名ゝ明王是をきゝて眠をさまゝ夜まゞ暗天ふ内裏の時の鳧鐘響耳ふ徹〳〵てきこゆと百官禁中ふ卧さるゝのゝうけて云

朝候日高冠額拔夜行沙厚履聲忙

連句ゝ一説ふ作者菅公ゝと朝ふ内裏ゝ參候をるふ日高て作者不知あそかりて冠のひさぬけるもらず急ぐ大内夜行の官人庭の沙上ゝ

古京

履をひ〳〵あり〳〵さまえ亥の一刻より子の四刻まで左近衛丑の一刻より寅の四刻まで右近衛の司夜行あり其刻履をもち弓絃打ならしあ〴〵〳〵某と名乗子の三ッ丑の四ッと奏すること

ある近衛司のことのわヤと云又い夜行翁と呼るあり

御垣守衛士のたゝぬあ〳〵ぬ衛らもそたけ　中務

大内の御垣をまもり夜い通用の門一所〳〵き内ふ火をそ〳〵守る左工門右工門の下ふつふ士の役ゆ〳〵衛士と云まるさふ〳〵ひと讀

おりひの火をそ〳〵恋哥なれぶ

上の五文字うそ禁中の部ふ入

拾遺

あふぶふひろさやそさ秋の月雲はれ〳〵ぬ思ひやられ　菅原道真

延喜の御時八月十五日藏人所のあのこども月の宴〳〵うるあとあり藏人所い校書殿ふあり別當い左大臣〳〵帝の御坐より遠けきびて〳〵さ〳〵も月の光さやけさふ

天子の御前清明おりひやら〳〵

古京

古さ京〳〵奈良の都滋賀の都

あゞのごと京い高てあそ〳〵そこと訓〳〵

緑草い如今麋鹿の苑。紅花い定て昔管絃の家る〳〵人

故宮付故宅陰森る古柳疎

緑草如今麋鹿苑紅花定昔管絃家

大和国奈良の都い元明帝より光仁帝まで七代の京城　菅三品

〳〵ふ桓武帝の延暦年中今の平安城ふ遷され〳〵今此詩い奈良の古き都あり地を過て作る〳〵さも繁花の地うて有つ〳〵もこゝろの草茂今い鹿や麋の臥る苑とる其中ふ紅の花さける処てそ昔管絃杯せ〳〵所うもやあ〳〵ん

と思ひやる感慨あり

新古今

石ゝあるそ苑をときてうまびむりしかざ〳〵ぬふけり　後鳥羽

和州石上いむし安康天皇宛穂の宮ふまり〳〵仁賢天皇廣高の宮ふまり〳〵都あり也ゆ〳〵る苑こゝもと云又布留ふつ〳〵る地也〳〵ゆ

と云りけ〳〵大宮人のむしろざを〳〵花ぞ今も

咲て花いる〳〵ぬ〳〵ぬ春のゝのざびし〳〵さをといふ

故宮付故宅

宮闕の故あれふる古宅い常人のすみうあそ〳〵る〳〵

陰森古柳疎槐春無春色獲落危牆

槐春ゐて春の色無。獲落たる危牖壞宇。秋ゐて秋の聲有

臺傾てゐ滑石猶砌ゑ殘簾斷てゐ眞珠鈎ふ滿不

強吳滅て今荊棘有姑蘇臺之露瀼瀼。今虎狼無咸陽宮之煙片片

壞宇秋有秋聲

公乘億

漢の武帝の造のゝ連昌宮のあれたるさまゝ陰森たる古柳枝うれくまぐゝなる槐ゐどゝ多くゝある古木も春とむくても葉もめぐまず花もさくひび春のいろゝえぬ獲落たる危き牖やぶまたる宇あまたそ〳〵古き宮殿秋のけしきいとゞあれたるふ風の声て吹荒さまゝ

臺傾滑石猶殘砌簾斷眞珠不滿鈎

帝の御女を公主と云其住のひ〳〵旧宅と題せ〳〵臺ゐ傾て滑白ふゝぶたる石礎ゐゞふのゝ真珠うてゝぶれる簾もゝ〳〵殘ずゝあよ鈎ふもくらぬぞ翠簾とゝぐるゝだと鈎とりふ砌ゐ皆下るゝ

強吳滅今有荊棘姑蘇臺之露瀼瀼

暴秦衰今無虎狼咸陽宮之煙片片

河原院の賦ゝ崔峩天皇の御子融の大臣と云ゐ限ゐ允風流の源順人ゐて庭ゝ奥ゐ鹽竈をうしゐ河原左大臣是ゝ其失のひてのち故宅のあまてるさまを賦せゝ此句の心ゐ吳王夫差のつゝしも越王句踐ふゝろぼさを姑蘇臺ゐて名高さうてるもあまゝ荊棘ふ露ゐ瀼々ゝ吳越のゝ雲の詩ゝ秋ゐ秦の始皇人を暴虐と虎狼ゐゝゝく暴秦と云史記ゝ秦王の人とゐ蜂の準摯鳥の膺豺のゝ虎狼の心と云咸陽宮を造られゝふ周三百餘里長生殿不老門瑠璃真珠の砂をゝた金の日銀の月とうけ仙人洞のさまをうつちりかくあしも始皇ゝまのゝいゝなるゝ楚の項羽の軍兵ふれゝて火をゐるゝ三月のあゞ烟さゝざりと庁ゝと作ゝ

老鶴從來仙洞駕寒雲在昔妓樓衣

崔峩天皇の住のひ〳〵宮のあまてるを作ゝ故宮ふ老る鶴の殘りすむいむしの仙洞の駕ゝてゐん雲のゝふびけるいゝゝのゝて舞る妓女の衣のゐるゝん舞姫の舞樓と妓樓と云

菅

孤花臺露啼殘粉暮鳥栖風守廢籬

后の旧院ゝ題せる孤花ゝ一房さける花ゝ露と美人の涙ふゝとゝくもかいと女の紅粉と施ふよゝくむしのりげと思ひやゝとゝふのゝ

良春道

老鶴ゝ從來仙洞の駕。寒雲ゝ在昔妓樓の衣ゐん

孤花露と臺で殘粉ふ啼。暮鳥風ふ栖で廢籬と守

荒籬に露を見れば秋蘭泣。深洞に風を聞ば老檜悲り
晩に向ふて簾の頭に白露を生じ。終宵床の底ニ青天を見

まる花の色を残粉と云夕暮の鳥の風になびく枝に栖てすゝれるまがきを守るのミにて人の音もなくさびしきをいふ

荒籬見露秋蘭泣。深洞聞風老檜悲　源英明

仁和寺寛平の故宮あれ古き檜一本ちりけるをミて昔を思てつくられけるまがきに秋の蘭つゆにうるほひてるさまむかしをこひてなくとミゆる深き洞のうちに年経る木の風にむせぶもかなしむるとさこゆるなり

向晩簾頭生白露。終宵床底見青天　三善宰相

我が住屋舎のやぶれたるを作る棟もやまで夕のまくつゆすだれにつゆむすびて床にあをぐに夜もすがらあをぞらをうかがふ

古今六帖
君すまであれまさる宿の板間より月のもるにも袖ぬれにけり　よみ人しらず

ふる内裏のあと　月をミて感慨之板間より月のもるにもそでをぬらすかくまであれし月のもるにも涙に袖をぬらしけるかなと思ふ

君なくてけぶり絶にし塩竈のうらさびしくもみえわたるかな　貫之

古今哀傷の部に河原の左のおほいまうちぎみの身まかりてのちかの家にまかりて有けるに塩がまと云処のさまをつくれりけるをミてよめる　又かしらの五文字君まさでとあり　梢間と浦さびしくさふようそくてうにて
河原院は六条坊門の南万里小路八丁四方と云　融公の也故宮の詩三章白の秋あらなり

いにしへのちるをや人のをしむらん今は花さへむかしなりけり　一条摂政

いにしへの落花をおしミし人も今はなくなりて旧跡の花はむかしながら咲ば花までもむかしを恋らん

仙家 付 道士隠倫
壺中の天地は乾坤の外。夢裏の身名は旦暮の間

仙家 付 道士 隠倫

仙家は仙人の宮也　釈名に老て死せざるを仙と云　仙は遷也　遷て山に入故に字を製する也　人山に傍り　道士は仙術をまなび得たる人　隠倫はかくれたるともがらと訓て　賢人世をさけ山谷にのがれかくるゝを云

壺中天地乾坤外。夢裏身名旦暮間　元稹

世の無常を作るなり　昔唐の長安の市に薬をうる老翁あり　其うちあやしく薬の価をろんぜず　汝南の費長房市椽なりしが楼上

藥爐ふ火有て丹
伏應雲碓ふ人
無して水自春

山の底ふ薇を採び

ふあつく晨とろろ彼翁一の壺を置て日のくる〳〵時人ふあるまず壺中に飛入度〳〵そてあゆ〳〵ゑ人をすと尊をうゆ〳〵食物をあくけり
ある時翁の云君ふ金骨の相あり仙道と学ふ〳〵さう日晩て来るべと教のごとくいくれば我ふあるぶつと入まと壺中ふ入長房つきて入まび壺のうちふ天地日月宮殿樓閣あり侍者數千あて老翁と扶うやま〳〵長房くのうちすぐ〳〵ゆ〳〵古郷ふ子れぐ〳〵くければ是ふ乗てゆけと一つの竹竿と与へる長房のて長安ふうり竹杖と葛陵という処の水中へなげすてくまび〳〵ちまち青龍くなつく天ふ上り去と神仙傳ふ出元模幽栖の詩ゆへ已ふすまひと壺中の天地ふ比べ別世界ゑるころを乾坤の外と作もろ荘子夢の裏ふ胡蝶とゆつく花苑ふあそび覚まびするうち一旦〳〵と云ろう佛家のあくゆべもろぐ〳〵ころをうゆて世上の身名いゆめのごとくくちとして

藥爐有火丹應伏雲碓無人水自春

郭氏の人仙術を学び山ふあり尋ふあず其すをうて作もろ白藥を煨する炉のうへ金液丹銀丹など云仙丹ゑ伏〳〵あるるんと思ふ雲碓いあて水人もるれば谷水をあるけおのれと春〳〵むくゆる仙家のうつゆ雲の字をつくぞ仙人雲母を搗くらつと云

雲猒不。洞の中ふ
樹を栽び鶴先知
三壺雲のごとく浮。
七萬里之程浪を
分。五城霞のごと
峙十二樓之搆天
ふ插り
奇犬花ふ吠聲紅
桃之浦ふ流驚
風葉を振香紫
桂之林ふ分

山底採微雲不猒洞中栽樹鶴先知

隠者ゑ山居せるをを作〳〵山のれふるらびを折ふ雲ふ温庭筠
いくくくくくくくゆ世上とくくゆ山居の心まく〳〵雲を山の主とせくくろ
あく作もろ洞のうちふ木をうゆまび鶴ゑ知てものゑすくくと
思ふ人ごとくいくくくゆ物もづうなくさまるあり

三壺雲浮。七萬里之程分浪五城霞峙。十二樓之搆插天

都良香

神仙を題くもろ策の文く海中の三山方壺方丈蓬壺蓬萊瀛壺瀛洲と云其くうち壺ふ似くく三ッ相去こと七万里上ハ雲ふつく下ハ大海のるををくくあくくゆ崑崙山ふ五城十二樓あり仙人常ふ居処と拾遺記や史記にあまび神仙を虚妄と云べくくびくく雲くくゆくい天を云

奇犬吠花聲流於紅桃之浦驚風振葉香分於紫桂之林

同前

謬て仙家に入て半日之客為と雖恐い舊里に歸て纔に七世之孫に逢こゝを

上と同じく文に晉の太康年中武陵の人溪に魚を釣るに桃の花流来る源をたゞのぼるに桃多く咲こゝに其地に龍麟の文虎豹のまぐれある大あつて奇声して吹こゝに其地の人に逢て問ふに秦の乱をさけて此処にきこゝに數百年を経ると桃源記に云ふ此心を作る驚風に風紫のうつゝに仙宮の木むら天台山の石橋をこゝに人せ一人あつて空に声あつて汝此にとゝる器にあゝずと云ふぞ此山に久しく住し仙術をおこなひのちに桂の花の香をたゞして仙道を得さしよゝ桂父と云此故支をつくしけり

謬入仙家雖為半日之客恐歸舊里纔逢七世之孫

後江相公

二条院の文會に相公序者にてやされこゝを仙家に半日の客なるこゝに句に述異記に晉の王質石室山に入て木を伐るに童あまこゝ碁を囲居るを見ずして在けるこゝ日もゆくべるまゝ帰人にもるに持る斧の柯くちたりおどろきこゝに我に先祖山に入て帰らざるのあゝに聞こゝに君いに其人なるやさいに吾に七世の孫なるこゝに故事なり

丹竈道成て仙室静に山中の景色月花低

石床洞に留こゝ嵐空拂に玉案林に拋て鳥獨啼

桃李言不春幾暮煙霞跡無昔誰栖

丹竈道成仙室静山中景色月花低

山中に仙人の住すに跡ある心に四韻秀句にて皆此集に入是起句に丹薬をこゝに成就に天昇せに山中のけしきに月の花もやさしくに

菅三品

石床留洞嵐空拂玉案拋林鳥獨啼

上の詩の腕の句に仙人の即る石の床に洞のうちにのこりて

同

ある仙人さしたるに独鳥のなくに洞に林に山中石床玉案に仙室をしめて云

桃李不言春幾暮煙霞跡無昔誰栖

これに腰の句に仙の去るあとに桃李の花のむしにしるしに咲けれど非情のものに仙人去ていく春をすぐせや問ども不言に漢の大將軍李廣武威にすぐれあけまども口ごゝろにて言て希へされども門前市を車馬にえざるを史記に桃李不言下自成蹊と云ことをこゝにて

同

王喬一去雲長斷。早晩笙の聲故溪に歸

商山月落て秋の鬚白。潁水波揚て左の耳清

桃い仙家の木く煙霞のふるびくのうて主いおくもこあぎれば
むし誰ぶすしと云こもーまね桃李い山中誰栖い仙室へ

王喬一去雲長斷。早晩笙聲歸故溪

れい落句ん上ユ通ー律一章へ周の灵王の太子王子喬 同
又い王子晋好で笙をふさ伊水のやくうユあそび後仙とるく七月七日白
鶴ユ乘候氏山ふ来て雲中ユ笙をふさーと列仙傳ユ出今ふ云仙
を王喬ユ比ーいつ溪ユ帰り来んと云へ故の字い故郷と云おくー

商山月落秋鬚白。潁水波揚左耳清

山中ユ懐ひを述ふる人商洛山い四皓雲の詩ユ 後江相公
さけてかまを居る処西へ月落と云て齢の老ふるくふ又春夏物さへ人
ふ秋冬へいおくふる西へ秋の鬚ユ依り堯の時許由と云賢人世をそむき
潁川のやくふ隠る堯位をゆづんと召れんべ憂ーくをきけくて此
川ふ耳を洗ひける時巣父と云りの牛ふ水ろ人ユて来りて面をと
あくつく後耳をあくへべさふ先耳とあふいかと問らくて帝堯我
をとりつく九州の主とせんと云れ其声を不浄ーくよろて耳をさまむ
と巣父罵てへ捕の材木ふよろくきも嶮峯ユ生まべのナべき車の

こちろくうくうくへさたうるけれべ匠もちくおうぞ汝も深くかまべさる
こへ聞まで其汚くる流のするふ水ろぶ牛の口を汚もべーと牛を水上
へひきのきたり此故吏ユて水をすくうを波揚ユて依もうへ
左の耳と云い医書ふ沐浴をるい先左の耳をあくうと

虛澗有聲寒溜咽。故山無主晚雲孤

山ふ隠士すと云題ユて賢君の世ユい皆出て仕ると云澗も虛 紀納言
くくい溜水のすべれさふくべ咽び隠士出ー故山ユ主もるくれべいま
目ふ見るるのい晩景
の孤片の雲のくすう

通夢夜深蘿洞月。尋跡春暮柳門塵

上古の賢士の風儀とるふ心の題へ蘿ーつき洞の中ふうる 菅三品
賢者ふ比さまと夢とこう覚てまぶうつユ其賢者ふゆきあくと飛ろ
くくく思へべまぶ夜も深くー月ひうてうるるふぞさてい夢へくーと心づく
後漢の辺詔つふ昼寝す弟子諫ーべいくくくてい周公と夢とつ固
まづうて孔子と意と同うすと云故吏もうくさう下の句い故人のすくう
をるくひて跡とふべ春くれて柳門の塵のくある陶潛字い淵明彭沢

の今とする其門ハ五株の柳をうゑ其下ハ酒と飲さうこけう時の人五柳先生とよぶ此故事之塵い麴塵ゝてやうゝの葉の黄なると云春の卷其外往々釈くいく出ら

古今

ぬまてらんこ法ぬ式菊の蕊のまにいつゝ手をを動い多ハけん　素性

仙宮ハ菊とゝけて人のいまるゝとよあとひろ寛平の御時菊合せ〜もけるハ盃のゝいの事ふいろ〜のつくりものと〜結構せ〜れ〜ことあるし其一ツ〜露のまい時の間と云けゝ彭祖い菊と服〜七百才をゝもち晋の王質木樵こゆきて囲碁とそ斧柯のくれ〜故事

麗縣の民菊水をのゝて上壽と得ゝるたぐひの故事ゝ

山家

遺愛寺鐘敧枕聽。香爐峯雪撥簾看

白居易匡庐山の辺ゝ山荘とゝめ草堂とつくり東のゝ〜五首　白

の詩と題せ〜其句〜山荘ちゝき遺愛寺のゝひい枕ハひゝくゆ〜首とゝ

蘭省花の時錦帳下。廬山の雨の夜草庵の中

漁父の晩船い浦を分て釣。牧童の寒笛い牛ハ倚て吹

王尚書之蓮府麗則麗。恨らい唯紅顔の賓のゝ有こと。嵇中散之竹林

げてき〜此処庐山の香炉峯の　ものゝ居ゝ

其雪ともゝる山居のけ〜さ心ゝゝるとゝ

蘭省花時錦帳下。廬山雨夜草庵中

白氏雨の夜独宿〜てこきの友へよせ〜上の句い其友朝ハつゝ　白

栄達ハかゝるさまゝ蘭省い尚書省本朝ハ大政官のゝ〜繁花のゝゝの

花の時ハ花のゝゝの下ハ笑栄てをおけすらめと思やらゝ

それゝ引ゝゝれい山中雨夜のゝゝれいゝゝゝさび〜くゝある

漁父晩船分浦釣。牧童寒笛倚牛吹

杜荀鶴

石壁の水ゝのぞめる閣ゝ上て賦でゝ日もくれぐさハ漁ゝる父ゝ

ゝの浦〜ゝの〜〜と分つゝ釣とゝれ〜居ゝ寒笛の音のきこゆゝし

ゝい童ハ牛とひきゝる〜吹〜倚い

ようゝゝ心ゝて牛ハのゝて吹来さまゝ

王尚書之蓮府麗則麗。恨唯有紅顔之賓。嵇仲散之竹林幽則幽。嫌殆非

い幽なるこゝ則幽なり。嫌らくい殆素論之士ふ非ずこと

南ゝ望い則關路之長有。行人征馬翠簾之下ふ於駱驛こう。東ふ顧い亦林塘之妙ある有。紫鴛白鷗朱檻前ゝ於逍遥す

山路ふ日暮。耳ふ滿者い樵歌牧笛之聲。澗戸ふ鳥歸。眼ふ遮者い竹煙松霧之色

花間ゝ友を見さび鶯語を交洞裏ゝ家を移べ鶴隣をトを

素論之士

菅三品

尚齒會の詩の序ゝ唐の會昌年中に白居易六人のおとゝをまもき
ともゝ七人宴會とゝ官位貴賤を論ずず年長ぜると上ゝつゝぬて尚
齒會と称す齒と尚ゝ此會いまふつゝ藤の亞相在衡卿の山莊すて
この會行なれゝ時の序ゝ王儉字い仲寶南齊の尚書令と云官ふか
もう其宅ふ蓮あるよゝ蓮府と云ゝゝ大臣蓮府と云王
儉ふ府蓮あてゝうゝんども紅顔のひとゝあしらべ此會ゝらず
嵇康字い叔夜晉の中散大夫六翁ととりふ竹林ふあそび人その
おもむきのしづるあるといいども素昔のてふどとよく論談をる士も

あゝびくれも此會の人ゝまいおうぬ七賢のてゝ
前の竹の詩ふ釈も會の釈い末卷老人の詩ふ出

南望則有關路之長。行人征馬駱驛

於翠簾之下。東顧亦有林塘之妙紫

鴛白鷗逍遥於朱檻之前

源順

白河院ゝて文會あり。其序ゝ其地いまの法勝寺のあとのれい南ゝ
粟田口逢坂の関路をるふゝくゝつゝあり行人征馬のようひきつゞさ
ゝすの外をすぐるぞうゝ近くゝゆる東のさい院中の林塘
景色妙ふ紫鴛や白鷗さまゝくの鳥ゝ朱檻の下ゝ逍遥

山路日暮滿耳者樵歌牧笛之聲澗

戸鳥歸遮眼者竹煙松霧之色

紀齊名

三月まつさ遊らんの詩の序ゝそゝそゝとゝ〜こまりきて山ぢゝ日も
くれゝゝを樵夫のゝゝや牧童の笛の声がきてゆるのゝゝて澗の戸ゝ鳥も
ゝり松竹ゝゆゝべの霧けゝりのいろのゝ
ゝゝてさびゝきぞんゝゝのけゝを述ゝゝ

花間覓友鶯交語洞裏移家鶴卜隣

紀納言

山居をトゝる題ゝ山ゝすゝて花を友とすゝべ鶯のさゝづるも
語を交友と思ゝて家を洞ゝうゝゝゝるべ其とゝりい鶴が来て居処
とする山居さびゝきさゝゝ世上の人をとゝもと世でも云ゝも友いのふゞも
あゝと云ゝゝゝトい我のふト領をゝを云ゝゝゝ哥のゝゝとゝゝ

晴て後の青山ハ廡ヲ臨で近。雨の初の白水ハ門ヲ入て流

石ヲ觸春の雲ハ枕の上ニ生し。峯ニ銜暁の月ハ窓の中ヲ出

晴後青山臨廡近雨初白水入門流

都良香

雨やゝ雲そゝれば山の青さも廡ちゝ臨そゝめ雨そゝる。白水ハ溝ヲあづれゝ門のうちをぞゝ

觸石春雲生枕上銜峯暁月出窓中

橘直幹

山寺ニ宿して依ニ石根ニ起る雲ハ枕より生ずると思ふ。ぐゝ卧處ニ来びと峯にともゝあつきの月も窓の内ゝ出ることなりけり

古今

己里ハ花のさかりとあき世のうちにハ侵ようゝ侵ゝ

山住の方ニこゝで哀ともさびしゝもすべてゝぐさけまど世のうゝをぞゝるまびたゝ住しきハ一度をきゝぬこゝ

古今

山里ハあだでさびさはまさりけるゝ人めも草もかれぬと思へば。　宗于

山里ハ四時ゝりてさびしゝまど春ハ花夏ハゝぎす秋ハもみぢふるのゝもさゝもあり人めをもこそぐる木の葉ちり草も枯ぬる比ハまさりけるとゝ心を思ひ入るべしゝそ人めの離と草のゝゝとよそうれぬるもゝ

田家

碧毯の線頭ハ早稻を抽青羅の裙帶ハ新蒲を展

家と守一犬ハ人を迎て吠。野ハ放る群牛ハ犢を引て休

野酌ハ卯時桑葉の露。山畦ハ甲日稻花の風

田家

田畑ニ近き家なり

碧毯線頭抽早稻青羅裙帶展新蒲

白

春湖ハ題せゝ毯ハゝもと訓糸ニて厚ゝ織る敷ものゝ暮春のころ早稻の出ゝる碧の毯の線頭ニ似さゝ早稻ニ世ともゝ蒲のそゝらて展さる青き羅の裙や帶ニ似ゝゝ

此詩早稻の字ニて田家の部ニ入るゝ

守家一犬迎人吠放野群牛引犢休

都良香

飼犬のゝるゝざる人を吠野ニ群る牛ハ犢を引昊休ハあゝさも田家のているまゝニのゝゝ

野酌卯時桑葉露山畦甲日稻花風

紀齊名

野酌ハ墅辺ニ酒をのもゝ卯の時ニ酒をのめハ桑ニ露ゝと白氏文集卯時酒の詩あり又桑木の洞ニまり水のあぢをひ義ゝけるとまのび酒を製初さるゝ桑葉のつゆハ酒のゝ山畦ハ山田の畦ゝ立秋後の甲の日の風ニ百穀ハ実ゝすと云ゝ稻ニ花さゝ風と依る

蕭索村風吹笛處荒涼隣月擣衣程

隣家

明月好同三徑夜綠楊宜作兩家春

獨身を終まで數相見可子孫長作隔墻人

池邊別業是何人聞道陸張昔隣

枕ふ落波の聲ハ

蕭索村風吹笛處荒涼隣月擣衣程

高相如

蕭索ハ風の声荒涼ハあれてすさまじき風のもとり笛の音

月のもとふ擣衣のきこゆるさびしき田家の秋のさまを隣の字ハ家居之

拾遺

春の田に種をまくと人に任せてとうとくもうちもとる

世に民ゆたかるるさまを古今六帖に貫之の哥あり

續古今

五月の時をすぎしかば早苗も甚老ぬけるべ

雨もまばらで早く植よと田子ハ早乙女なり

古今ハ人まちまちとあり一しかるを清てよむべ

稲葉の風に時のうつるを思ふて苗を植ハ昨日のごとし云

隣家

明月ハ好ものなる夜三徑の夜。綠楊ハ

兩家の春を作宜

獨身を終まで數

相見可。子孫ハ長

墻を隔人と作

池邊の別業ハ是

何人ぞ聞道陸

張昔隣とト

枕ふ落波の聲ハ

明月好同三徑夜綠楊宜作兩家春

元八と家をとなりにしてある詩の胸の句ゝ明月の光てふ吾白

家も足下の家も同じく三徑をてらしてあるとなり蔣詡字ハ元卿舍

の中に三ツの徑あり蒙求ハ三ツの徑ある兩家の境に

楊ぶある其ころの我家の春ハ有又足下の家の春ぞもあるこ

陸惠曉と張融と隣し池ふ柳わしをふまえて作まし

其故支前卷ゝびふ此次菅三品の詩に出

可獨終身數相見子孫長作隔墻人

上の詩の落句ゝ世上いかにかくも我らハ独身をちるまで數度さび

ふ面會をゝ子孫もたがつゝ永く墻一重へだつる近隣の人ゝ

池邊別業是何人聞道陸張昔ト隣

菅三品

池のもとの別業をゝめてあるハ是何人ぞむし陸惠曉と張融と

池とゝぶて家とゝもとりてゝを聞及べりトの地の吉凶を十住処とするこ

枕落波聲分岸夢當簾柳色兩家春

柳の色ハ両家の春
岸を分夢簾に當
春煙迹に譲簾
前の色暁浪潛
に分枕上の聲

山寺
千株の松の下雙
峰の寺一葉の舟

同　前に逼し絶句一章之陸張が家のあたりに池ありて其波の声ハ此岸彼岸とうち各の夢をおどろかすそれハ其池辺の柳のいろハ両方の簾にあたりて見ゆる両家の春にてある前の句にてよみとじ

春煙迹譲簾前色。暁浪潛分枕上聲

直幹　春煙ハ柳のいろを煙にみなせてし両家の中によこびく柳のいろふびに他の家のめさのまへにあると思心へ池にあかつきの浪のおとハ声ハ両家の枕の上におち来るあすよや
さうぞうもまへの二三章の陸張が故事之

伊勢　君が宿わが宿わけるたつぞさへうつろハぬまつえん人もかな
古今六帖にうつろハぬ時とあり貫之の哥ハ垣をうたつぞに云うけるうつろもそうぬ時よまん人もかなとあり

山寺

千株松下雙峰寺。一葉舟中萬里身

白　白氏香山寺に隠居の詩之数千株松樹しげりたる峯の下に香山寺と遺愛寺と双よるかすかにすまうたる景色一艘の舟よのり万里の波をわたる人の上をおもひやりし句之ちりたる一葉水に浮ぶをみてはじめて舟を造るとあるゆゑ一葉といふ

更無俗物當人眼。但有泉聲洗我心

白　灵岩寺に宿し其けしきを作しし世俗雑涤の境界ハ一つもみえずす飛泉の音が心の塵垢をあらふやうにきよくする

不改朝天之門。便作求車之所。不變閑水之橋。以爲到岸之途

野相公　滋野井宰相吾家を寺となし慈眼寺と号す其寺に法會行ま法華講ありし時の詩序之天子ハ朝セし時出入しつる門をあらたメず其まゝ佛法求車の門となすこ法華譬喩品に佛の方便をもて一乗の法を説て衆生をみちびくを羊鹿牛車平等大會の車なぞらえこれバ其法をもとむる心にて求車と云しこ閑の字和訓をのどかとよめり橋をかけれに水をすべせまくして其処によるん又文選に川を閑水と云

の中萬里の身
更に俗物の人の眼
に當無但泉聲の
我心を洗有
朝天の門を改不。
便求車之所と作。
閑水の橋を變不。
以到岸之途と
爲り

馬に策て来時只風煙之翫可逢僧談
世俗之皆空るを覺

人の鳥路の如雲を穿て出地の是龍門水を越て登

到岸にのぼりて出仕せ時ふるこけ橋を
そのまゝ無餘涅槃の彼岸の道とすと云く佛家の煩惱即
菩提のこゝろ
をゝくめり

策馬來時只思風煙之可翫逢僧談
處漸覺世俗之皆空

源英明

英明中將鷹狩の次圓成寺に入其こゝろのうど風の音烟のゝ奥あるこゝ心よそみくなるゝ其日聖宝僧正の坊に宿せらる僧正佛家の無常を談殺生を戒るゝぞ煙霞風月のおりゝき
をこすまゝ無常のこゝろを覺る意を作る序なり

人如鳥路穿雲出地是龍門越水登

大和国宇多郡龍門寺に むし勤操僧正旱の時雨をいのり 菅丞相
石上布留明神して法華経讀誦ある藥草喩品をよみて小龍現ト
雨を降せり此又こ寺を建龍門寺と名づく此寺おりて作る詩
なり此寺に登まべ高くてこゝ空まで雲を穿出るゝと鳥路に空ゝ

三千世界眼の前に盡十二因緣心の裏に空

寺の号に唐の龍門に よせていう異邦龍門の瀧に數百丈に落
來り其下にあつまる魚ゝ飛泉に上るゝ龍となりて
天に沖るゝ門を龍門と云今此寺も其ごく水に
越て登山するゝ越々除珍切履ちり

三千世界眼前盡十二因緣心裏空

竹生嶋に詣て作るゝ近江の湖にゝ見渡て世界 都良香
に觀ト盡せる心に云三千世界に須彌山にある世界に一國土
とゝそゝに一千つゝて小千界ゝに一千つゝて中千界ゝに
一千つゝて大千界ゝに三千つゝて三千大千世界と名づく
又貪嗔癡の三毒に各一千の煩惱に具る三千世界と云
下の句に此處にて十二因緣に觀ずべ諸法に心の内り
空々として煩惱の纏のる處をと云意あり所謂十二因緣に
無明 過去に起て煩惱に胎内にやゝ〻ざる以前の中有り
行 父母交合の義に以上の二に過去の二因に 識 父母交合の
とに母の息の入るにつて胎内に託る 名色 名に心法色に淫
水赤白に其時に形肉團のごし識心淫水に託て和合るゝ
六入 胎内にて眼耳鼻舌身意の六根のこゝ現ぞに

泉飛ハ雨聲聞の夢を洗。葉落は風色相の秋を吹

[觸]そでに胎内より出二三歳の間に[受]領納と云て松ハ松と思ひ竹ハ竹と思ふ四五歳の後苦樂取捨の差別あり以上ハ現在の五果に[愛]十四五歳の後物に愛する心ある比を云[取]二十歳の後物に執着するより[有]義取と同じ以上ハ現在の三因なり[生]現在の三因にうて未來の生を感ずるに[老死]今生の身のそでに死するに以上ハ未來の二果に過去の二因現在の五果現在の三因未來の二果此因果ようる因縁と云此因縁の生死の絶絶とるに三界に流轉するも此嶋の境地の幽玄なるより心の裏に空すと作しに○良香上の句に作自愛一下の句を思ひづくに辨財天夢中に句に教と云ハ怪べし好事の說

泉飛雨洗聲聞夢葉落風吹色相秋

石山寺に詣て作るに聲聞と僧に云飛泉の音ゲ雨ホ高相如似て僧の夢に驚す意に洗ハ心の垢を洗ふに色相ハ有爲有漏の法の色くちにあるそを云樹の葉をさらふ峯の嵐に草木に無常遷變の仮法に盛なりし色もおとろく黄葉となり散失るを秋と云しに

拾遺

くもぬい日の暮ぬに
其外ハ解ホ及ずきに

ちのをとをとすれハ
ちづくしをるに
よ
ハ
ひけるに　花山院

園城寺にて御製に詞花集にうぬべきるとあり
出家御修行まに櫻の花咲る下ふやすしひるものに

佛事

月隱重山兮舉扇喻之風息太虛兮動樹教之

智者大師

摩訶止觀第一の文に釈尊法華経を說きに上中下根の機に志ぶひ法譬因縁の三周の說をとをけるに譬說の心を釈でる文ふて上根の弟子に法をきてさに中下根のともに迷と
いふに月のくもる山にうに風の太虛にやするにとに扇をあげ樹

月重山に隱ぬ兮
扇を舉て之を喻。
風太虛ホ息ハ兮
樹を動て之を教

願以今生世俗文字之業狂言綺語
之誤翻爲當來世世讃佛乘之因轉
法輪之縁

唐の太和三年十二年のあらの詩賦八百首十卷と龍門
の香山寺の経蔵ふ納ふ白氏洛ふ在り時ふて其序あり
狂言綺語ハ詩文をさていう佛道修行の外ふいふる文筆
を法華安楽行品ふいまゐ誤と云さんも諸法實相
の嵐谷のしぐき鴉鳴鵲噪ふか佛法と観ぜんべいまゐ
楽天が経藏ふ納ふ詩文も来世成佛の因縁と成ん

と祈ふ心ハ當来ハ未来ハ讃佛乘ハ佛と歓喜ハ功德と讃ふ
乘ハ運載の義ハ轉法輪ハ行住坐卧法のわふ出ず人をもちびき
法を自性ハ法輪と名づく轉ハ
車輪をまろぐすることと

百千萬劫菩提種八十三年功德林

白氏鉢塔院の如満大師ふ後ひ毎年八齋戒を受ること九度ふ白
時の間菩提の種を植おくてあるとふ心まこと師の年八
十三ハ善根功德の林をなせると德を賛ハ劫ハ梵語ハ唐
ふ時と翻訳す又大乘の劫ハ盤石劫ハて四十里四方の石と
天人天の羽衣ハて三千年に一ぺび撫てなでつくをを一劫と子

十方佛土之中以西方爲望九品蓮
臺之間雖下品應足

慶保胤

深草の極楽寺ハ昭宣公の建立其願文ハ十方の佛土あんぐ西方
極楽浄土弥陀如来のまいまん方ハて望とう東方施德佛東
百千萬劫菩提の
種八十三年功德
の林

十方佛土之中ハ
西方と以望と爲。
九品蓮臺之間
ふハ下品ハ雖足應

十悪と雖今猶引
攝す。疾風の雲霧
を披くも於甚一
念と雖今必感
應す。之を巨海
の涓露と納る喻

南方无憂徳佛南方栴檀徳佛西南方法施佛西方無量壽佛
西北方楽徳佛北方惟徳佛下方命徳佛上方光衆徳佛中央
大日如来十方国土とうん下の句い上中下の三品に上中下乃
三生あり三〻あるを〻九品のわけを蓮ざいとら〻有進無退の
由を下品ちうを
足ぐ一とかう

雖十悪今猶引攝甚於疾風披雲霧。
雖一念今必感應喻之巨海納涓露。

極楽寺と賛もる文〻弥陀の悲願十悪の人を猶
引摂して疾風の雲をくひ雰をひらくが如く速〻身三口四意三〻そ
殺生偷盗邪婬の三つの身れ行ひ妄語綺語悪口両舌の四〻
口に言貪欲嗔恚愚癡の三つのこころの所作〻この十悪をも
あつまつて犯すとも一念弥陀を唱へ極楽ふ引摂せんと一ぺん
称一ぺん念ずる少〻の善根をもてのがるべき巨海に涓
露の微なるもうけ納
てきらこぬぐ〻とのこと

後中書王

昔忉利天之安居九十日。刻赤栴檀
而摸尊容。今跋提河之滅度二千年。
瑩紫磨金而禮兩足。

江匡衡

昔忉利天之安居
九十日赤栴檀を
刻而尊容と摸一
今跋提河之滅度
二千年。紫磨金を
瑩而兩足を禮す

仁康上人丈六の釈迦の像を造り正暦二年三月廿八日河原院に〻
五時講をおこなひ願文に書く佛ふ敷きたるこころぐ〻い昔もいま
もかう〻ぬ心をとり忉利天に三界に欲天ちう人間ちう四天王
まで四万由旬四天王ちう忉利天まで四万由旬とあり一夏のぎをを
安居と云釈迦三十七の年母摩耶夫人の恩を報せんとて一夏九
旬のあいだ天に〻のぼりて法を説摩訶摩耶羅是〻とあり其時下
界人間に佛在さるを〻干闐国王赤栴檀にて佛像を摸一仰
人〻〻時帝釈の臣毘首羯摩〻て匠のこころを究〻ると下〻〻
像とつ〻〻む是天彼王のこころざしを憐み〻〻とそ下の句い如来
滅後二十年にてう金容を拜さこころ貴きこと〻〻〻〻〻〻
跋提河唐にに無勝と云この河のほとり〻〻沙羅林あり四双八株
にて四い栄へ常楽我浄を表一四い枯て无常苦空無我を表

浪洗て消と欲竹馬に鞭て顧不。雨打て破易。芥雞と鬪ふ而長忘ざる

極樂之尊を念

十釈迦此処にて入滅す金の粉にて紫磨黄金と云佛は福と智と具足せるゆゑ両の足を尊ミ礼まると作り。作者匡衡聽聞の席に在導師文をよゝ此句にて保胤入道寂心同坐にあり文のいれゝと称ゝく

浪洗欲消鞭竹馬而不顧雨打易破。

鬪芥雞而長忘

保胤

暮秋の勧学會に禪林寺にて法華経を講ずときゝて方便品の聚沙為佛塔の文を題にして賦す詩の序に土をあつめさゝて佛塔に作らん童子のあそびなれば廣大の善根ともなるべし造り終てのちは雨にやぶれ流れて水の浪にあらそ損ぬ竹馬に鞭うち雞をけあせて居る後漢書に郭伋字は細候は并州の刺史にて部をめぐり河東にいたるに數百の小児竹馬にのりて是を迎と云故事左傳に昭伯と季平子と鬪へ雞を鬪まるゝ芥をそゝぐ鳥のつゞくめるあり

念極樂之尊一夜山月正圓先勾曲

一夜山月正に圓なり。勾曲之會に先と三朝洞花落と欲す

玉磬の聲に管絃奏納衣僧代綺羅人

之會三朝洞花欲落

紀齊名

村上天皇康保元年三月十五日保胤入道くゝめて勧学會を行ひける。其序に睿山の碩德廿人勧学院の学生二十人僧は法服に香炉を持て堂の正面より東に列りて志求佛道者の偈を誦て俗は束帶に笏をとり西ハつゝゐ百千万劫菩提種の句を詠て左右より坐に著朝より法華経を講ずゆゑ念佛を修す文士法華の文の題にて詩を作り講す此會狂言綺語の罪を滅せんとの文道先達の学徒に勧め三月九月の十五日に修すとぞ上の句は十五日弥陀満月の形容にて念佛の意を作まり下の句は唐に勾曲山あり三月十八日神仙此山に宴會すると勾曲會と云十五日なれば彼に先ぶつと三朝と云洞花は仙境三月中なれば飛花の時を觀ずる意又勧学院は三条の北壬生の西にあり藤氏の学生の学問所ゝ

玉磬聲思管絃奏納衣僧代綺羅人

九条右大臣の亭にて法華會を行ふる時の作とあり

野相公

あるゝ野相公と時代異なれば作者の名書写の誤なるべしとぞ磬

浪洗て消と欲。竹馬に鞭而顧不。雨打て破易。芥雞と鬪ふ而長忘ざる

極樂之尊を念

十釈迦此処にて入滅せ金の粉にそめて紫磨黄金と云佛は福と智と具足せるゆゑ両の足を尊み礼まつると作り。作者匡衡聽聞の席に在導師文をよゝ此句によりて保胤入道寂心同坐にあり文のいれゝと称しく

浪洗欲消鞭竹馬而不顧。雨打易破。

鬪芥鷄而長忘

保胤

暮秋の勧学會に禅林寺にて法華経を講ずときゝて方便品の聚沙為佛塔の文を題にして賦す詩の序に土をあつめいさごをつて佛塔に作らん童子のあそびなれば廣大の善根ともなりぬべし造り終てのちは雨にやぶれ流れて水の浪にあらそひ損じぬ竹馬に鞭うち雞をけあせて居る後漢書に郭伋字は細候は并州の刺史にて部をめぐり河東にいたるに數百の小児竹馬にのりて伋を迎と云故事左傳に昭伯と季平子と隣に雞を鬪まるゐ芥をそなへ鳥のつゞさをめゝくあり。

念極樂之尊一夜山月正圓先勾曲之會三朝洞花欲落

紀齊名

村上天皇康保元年三月十五日保胤入道はじめて勧学會を行ひける其序に睿山の碩德廿人勧学院の学生二十人僧は法服に香炉を持て堂の正面より東に列りて志求佛道者の偈を誦し俗は束帶に笏をとり西ゐつゝゐる百千方劫菩提種の句を詠ず左右より坐に著朝より法華経を講じ夕べに念佛を修す文士法華の文の題にて詩を作り講す此會狂言綺語の罪を滅せんとぞ道先達の学徒に勧め三月九月の十五日に修すとぞ上の句は十五日の弥陀満月の形容にて念佛の意を作まり下の句は唐に勾曲山あり三月十八日神仙此山に宴會をすると勾曲會と云十五日なれば彼に先ぶゝと三朝と云洞花は仙境三月中なれば飛花の時を觀ずる意又勧学院は三条の北壬生の西にあり藤氏の学生の学問所にて

玉磬聲思管絃奏納衣僧代綺羅人

九条右大臣の亭にて法華會を行はるる時の作とあり

野相公

あるゝ野相公と時代異なれば作者の名書写の誤なるべしとぞ磬

一夜山月正圓

勾曲之會三朝先

洞花落と欲

玉磬の聲は管絃に奏すと思。納衣乃僧は綺羅の人に代

眼の蓮は豈清涼の水に養んや。面の月は長十五の天に留まる

佛の神通を以て爭う酌盡す僧祇劫を經て朝宗せんと欲

の声を聞く日来の管絃を奏る声を思ひ日ごろ綺羅の花やかの衣裳の人の出入つるを引きて衲衣の僧〻〻〻

眼蓮豈養清涼水面月長留十五天

紀齊名

釈迦滅後の法を結集せんと並居給ふ阿難尊者有学にして其席にあつ上坐迦葉阿難の手を取り結集堂の外に引き出しけるに外にあつて思惟〻〻〻阿羅漢果を得給ふ神通を以て墻のあるより入結集堂の床に上りて衆僧世尊再生せりと仰ぐ迦葉坐と起合掌して讃して云面は浄満の月の如く眼は青蓮の華の若し佛法大海の水阿難が心に流入と阿含経に出るこゝろを以て世間の蓮は清涼水に養まてこそ用阿難の眼の蓮は尋常の水のやうにあらず常の月は盈虧定なるに阿難の面の月はいつも十五夜の満月を長に天にかけるごとし阿難の徳を称する詩へ

以佛神通爭酌盡經僧祇劫欲朝宗

江以言

勧学會の詩にて普門品の文を題に〻〻世間の海は大施太子貝を以て汲つくせり観音の弘誓の海は神通をもて汲盡し〻〻〻と云心を智度論に龍宮に往如意の珠をもて衆生の為に宝雨を降さんと十龍王にこゝろの珠をうばひけるに太子大誓願を起し貝を以て海水をくみさんとす諸天あまてこ俱に汲ぶ海水十二七八渇ぬべ龍王すなはち珠を返せ〻〻〻ある十万を洛又とす十洛友を度洛友俱脈。未陀。阿庾多。大阿庾多。那由他と次第に六十数にいたりて僧祇と云劫の時と云へ朝宗は百川の水海を宗として朝さるの義誓の海は久〻き時とつゝる万水と集へとく太子は釈迦へ

叩凍屐來寒谷月拂霜拾盡暮山雲

勧学會に提婆品の心を作まり釈迦因位の時轉輪聖王〻〻〻七宝の富にあ足る〻〻深く道心を發して法を求む阿私仙〻いに〻我に法蓮華の大乗の法をなり我に後に説きたまへ王の心を引る難行とうきゆ〻つゆ大乗の法を得る此心を作る谷水の凍をとくとやまる月の寒を屐て来る霜を打〻ひ雲に行基の歌に

凍を叩て屐来寒谷の月霜を拂て拾盡暮山の雲

巳に終て未千年の役を習㊍初て遇難一乗の文を得たり

巳終未習千年役初得難遇一乗文　同

上に通じて一章へ十善の君の位をもてなさがらり苦労ある役を習ふハ法の為なりそあれ千年の艱難の由へなまく遇ひがたき一乗の文（法華経の文なり）を得らるゝ方便品に十方佛土中唯有一乗法無二亦無三云々一説に上の句終身習ずして云心なり

此世にてのりの種を植ざれば君がいく代もよ身とぞなれる　九条右相府

君ハ弥陀をいへり来世の引接あるべき身となるハ此世にてのりの種をうゑし功力によつて其花さき実なる詞の縁あるべし

新古今　あのくたら三みやく三ぼだいの仏たち我立杣に冥加あらせ給へ　伝教大師

桓武天皇延暦年中比叡山を開基し根本中堂建立ありし時の哥也阿耨多羅三藐三菩提の佛とハ無上正編智覚とつゞめたる心也かりもなくふじく智のすぐれたるなく佛の位をとりて我立杣ハ比叡山也又材木をとりしもとを杣といふと云へ冥加ハ佛の暗に加護したまふをいへり今かく杣をも建立あり天下太平祈願道場を経営のかぎりを上もなく正しく智覚ある諸の佛たちもまもり給ふべきと

此心なるべし此哥より此山を我立杣とよみきたれり

千載　ごくらくハはるけきほどと聞しかどつとめていたる所なりけり　空也上人

拾遺集に仙慶法師の哥也十万億土と聞つれどつとむれば去此不遠なるがごとく遥ならぬなり

拾遺　いつしかと君にと思ひし若菜をば法のためにぞけふはつみつる　村上御製

天暦の御時故后の宮の御賀せさせ給はんとてありけるに宮うせ給ひければ其かはりて御諷誦おこなはせ給ひける御詠なり拾遺に法のためとあり心ハいつしか母后（昭宜公の女穏子）の御賀に奉らんと儲させ給ひし若菜と思の外今日の法事につませ給ふとなり

僧

訓す衆門へ

僧

蒼茫たる霧雨之晴初寒汀に鷺立重畳たる煙嵐之断処晩寺に僧帰

蒼茫霧雨之晴初寒汀鷺立重畳煙嵐之断処晩寺僧帰

張読

野寺ふ僧を訪歸
月と帯。芳林と
客と携醉て花と
眠

堂に毋儀有。以
中天の月と於逗
留すること莫。室と
い師跡有て五
臺之雲と於偃
息すること莫

閑居の賦に零々たる雨の蒼苔と〻〻晴る処とれい寒き汀
に鷺の立る寂〻たる煙嵐の重疊まる少き断処とに僧の
寺に帰るわの〻
ある晩景のさま〻

野寺訪僧歸帶月芳林携客醉眠花

野辺にある寺に僧をとむひて夜に入て帰ると月を帯と 英明
云〻芳林に禪林の心とうる〻客と伴ひ手と携て花とあめ醉ぐま
らう心地〻眠に此詩に醍醐一条寺の僧正とあひ帰依の思あつて
作る或説に鮑溶の作にて東郊の遁先處士とあ〻〻とと

堂有毋儀莫以逗留於中天之月室

有師跡莫以偃息於五臺之雲 保胤

斎然法橋入唐の時餞別の詩序に堂に殿に正寝にて父母ずと居
処と云ふ〻毋堂に云五天竺の中央と中天竺と云父母いますと
い遠くわをずとりへい彼地に久〻逗留べ〻〻毋〻帰て毋にま
へ〻室に房に五臺山に文殊垂跡の地あり師のわ〻も荒

明鏡乍開て境と
隨て照。白雲著不
山と下て来

空と觀ぜる淨侶い
心に月と懸老と送
高僧に首に霜と剃

鶴閑て翅に千
年の雪と刷。僧老
て眉に八字の霜と
垂

んとすに〻〻五臺の法に〻のぞむ〻る偃一息にふ帰ると急ぎと
ある雲に遠きを云心にて月に對〻〻斎然渡海の願文に先五臺
山にまつり文殊の郎身に逢と欲を次に中天竺に
釈尊の遺跡と礼せんと欲すと云〻

明鏡乍開隨境照。白雲不著下山來

僧の徳と賛る詩に智慧に明鏡のごと〻万境に〻〻ずと云〻 野相公
ある賢き僧に卧雲の侶も云て山に住ず適都に来ところふ白雲も著ぬ

觀空淨侶心懸月。送老高僧首剃霜。

源の順南都の般若寺に泰〻〻に老僧頭を剃て出迎る當 順
意の依ある般若の理に有為空無為空畢竟空と云ふ空と観する
に寺号とさて云ふ〻ある浄侶に僧に諸法空寂のもとと観とんで心の
月あきらに老とつる僧の白髪と霜と云〻

鶴閑翅刷千年雪。僧老眉垂八字霜

鶴に諸鳥の内ふ閑るるの〻背に翅とうのつくろふ雪と 源為憲
刷ふ〻眉に八の字のうら眉毛に白毛と生どると霜とふ〻〻ろ

天台智者大師の贊ふ目ゐ重瞳を現し眉ゐ八彩を垂とあり
此詩藤の憲材天台山ゐのぼる詩の和韻ゆゑかくつくるなり

後撰

さくら花いろをそめてもうつろへるあまの黒髪いかでかやうへん　遍昭

後撰集ゐ　をんなの頭をかしらとあり　ものふるたつけるかたち
とあり黒髪をとあり垂乱母い女親くるとそれといかく髪をあろ

せうとくのこゝろ烏羽玉い黒きとゐん枕詞ゐ母ちゝいかく髪をあろ
せうとくそれも我ゐろをうぐるんさそも思ひぐる身ゐあろりることを
の心ゐうまとくそれもふ深く餘情あり遍昭僧正い良峯の宗貞と
云ふ深草院かくまのひかゐん世をとるもなえぐるく家の人くるも
ちろせで比睿ゐのぐり慈覚僧正の弟子となり剃髪してのくるん
落髪の時須に流轉三界中恩愛不能斷弃恩入無為真実報恩
者と唱るこゝもありとゐ

拾遺

ちはやぶるしの葉ちりぬるせゝ過ひの家をいでゝ出まゝどよゝ下らぐ

法華經譬諭品に為求牛車出於火宅とある文の心へある長者の家
ゐ子どもあまた居くるふ俄ゐ大火出来くるゐ父の長者早く出ようと

ゝもあそびふけるゝを出ざらしゐ方便をとりつけ羊の車鹿の車牛の車
など作り是をあたえん乘て出よと云にいたれ火を逃て出るふ大白牛
車とてさまゝ宝ゝてらぐるる車とあるく安穏なるゝ喻あり
其心ゐ三界の安くぬさま此火宅のごく其衆生を救んとて方便を
ゝ華嚴阿含方等の小乘と說熟せゝ大乘妙法を說つゐ
成佛せるい長者ゐ子どもを助んと車とあるくるさくなるこの
哥のこゝろ此娑婆世界ゐくるひ三乘の法あるくるゐ一大乘
妙法の大白牛車のるくるせばいで三界の火宅を出離もぐさどと
の心へて思ひの家と云て火の宅とゐくうしの車い
法華經をさゝて云家を出ると云ぐうて此ゐ入

續古今

ゝゝ川の清さ流ゐすぐて我名をさゝふゐやけぐさん　玄賓

弘仁五年玄賓坊律師に任ず辞退の哥ゐ三ゐ川の清さるぐれゐ
あくひさもも衣の袖いさくにけぐもゝと帥の中納言匡房卿の江談ゐ
出僧綱辞退のゝ元亨釈書ゐ　一ゝび隱逸の身とあり
三輪山ゐいろれぐくまゝ清き流ゐすぐゝ我名を浮世名聞の
ゝめ二度汚さゝと厭離の心をはゝ
のぐゝ辞退せゝゐ三輪い大和国ゐ

和漢朗詠集抄巻之六　終